

# 平成18年度 広島市立舟入高等学校 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール 研究開発実施報告書

- 1 SELHi 学 校 名 広島市立舟入高等学校
- 2 研究開発実施期間 平成16年度～平成18年度（第3年次）
- 3 研究 開 発 課 題 『英語で議論できる効果的な発信能力を育成するための  
ステップアップ・プログラムの研究開発』

## 4 今年度の研究計画

---

- (1) 第三年次(平成18年度)の研究計画 (SELHi 申請時のもの)

・「発展的研究と研究全体の評価の期間」と位置づけて、段階的な指導の洗練、及び指導評価シラバスの系統化をする

- (1) 研究内容 の「ライティングからスピーキングへの段階的な指導」、及び研究内容 の「スピーキングから議論活動への段階的な指導」に関して

第二年次に修正と精緻化した指導計画に基づいて、指導を実践する

上記 の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法、及び関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等の完成を以て、研究全体の成果とする

- (2) 研究内容 の「科目間の系統的なつながりの研究」に関して

第二年次に改善したシラバス、及び評価規準に基づいて、指導と評価を実践する

上記 の結果と第二年次の結果を比較し、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とする

## (2) 第三年次(平成18年度)の研究計画の詳細

今年度(第3年次)の研究及び研究成果の普及に関する計画		
研究内容	研究方法	研究評価方法
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	<p>おもに1・2年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年次に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における『形成(Formation)』および『創造(Creation)』の各フェーズの指導を実践する。</p> <p>研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。</p> <p>1) 授業における『指導メソッド』の一層の進化 2) 『個人差』に対する適正な処遇 3) 時間と教育資源の『効率化』を図る指導形態</p>	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	<p>WSA テストによる「流暢さ」、「適切さ」、「正確さ」の各指標の測定。</p> <p>生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告</p>
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u>
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	<p><u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u></p> <p>「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度</p>

(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	おもに3年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における『加速(Acceleration)』のフェーズの指導を実践する。	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	<p>研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。</p> <p>1) 授業における『指導メソッド』の一層の進化</p> <p>2) 『個人差』に対する適正な処遇</p> <p>3) 時間と教育資源の『効率化』を図る指導形態</p>	
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	WSA テストによる「流暢さ」・「適切さ」・「正確さ」の各指標の測定。 生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u>
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	<u>指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」</u>  「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(3)指導評価シラバスの開発	研究の第二年に改訂したシラバスおよび評価規準(総合的・科目ごと)に基づいて、教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとのシラバスの目標に対する適合度
	上記(3)の に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	
	上記(3)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにするとともに、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とする	<u>研究の第3年次の「指導の成果(生徒のパフォーマンスの変化)」と「目標値の達成度」</u>  体系的な指導・評価シラバスの完成度

## 5 研究開発の内容と評価

---

(0) 本年度の研究開発の前提となること

(1) 「目的」と「評価」 英語で議論できる効果的な発信能力を育成する「ステップアップ・プログラム」

### 目的について

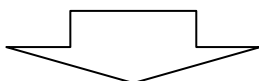
- ・ 本研究は「英語で議論できる効果的な発信能力(英語による論証能力)」の育成を主眼とする。
- ・ 「ステップアップ・プログラム」とは「英語による論証能力」の育成を可能にするため、具体的な目標値を設定し、段階的な指導プロセスを具体的に呈示するものである。
- ・ 「英語による論証能力」は、「『身近だが賛否両論のある話題』について、自分の意見を『即興』で話す力(Speaking)・書く力(Writing)」と定義する。
- ・ 「英語による論証能力」の構成要素は、Speaking と Writing における以下の3つとし、代表的な目標値を呈示する。

「英語による論証能力」を構成する3つの要素

---

流暢さ (Fluency)	75WPM(語 / 分)の速度で話すことができる
正確さ (Accuracy)	2.5%以下の誤率(誤数 / 総語数)の発音、文法で話すことができる
適切さ (Appropriacy)	適切な主張と説明を伴って論理的に話すことができる

---



### 評価について

- ・ 「生徒の能力」および「研究開発」の評価

本校独自開発の WSA テスト(Writing & Speaking test for Argumentation)を用いて評価する。

なお、WSA テストの構成と実施については、本稿5 - (0) - (10)および平成17年度研究開発実施報告書 pp 15-22 に示してある。

## (2) 「改善」と「指導」 ステップアップ・プログラムの第3案 (SUP3) 【表5 - 0 - 2 - 1】(次頁)

改善すべき課題

研究開発の最終年度である今年度(第3年次)の研究開発では、1年次、2年次の研究開発の結果に基づく研究計画に従って、以下の3点について発展を試みた。

---

『指導メソッド』 授業における『指導メソッド』の一層の進化

『個人差』 『個人差』に対する適正な処遇

『効率化』 時間と教育資源の『効率化』を図る指導形態

---

次頁に示すステップアップ・プログラムの第3案 (SUP3)では、上記 について、可能な限り内容を整理し、今年度はこれに基づくシラバスを作成し、指導に用いた。

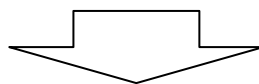
まず、上記 は、活動の内容(指導法)の洗練について、これまでの研究開発の取り組み全体を通して、「多様性」をもたせて行ってきた。最終年度である今年度はその試行錯誤の中から、とくに2年次の研究開発の結果と現場での利便性を考慮して、その指導内容の多様性について「単純化」を図った。

一方、上記 は、生徒個人の特性、つまり学力、適性、性格などを総合的に把握しての対処である。これは青年期の繊細な心情を考慮すると、粗野なパターン化は馴染まない「人間」対「人間」の力動に基づく複雑なプロセスといえる。従って研究開発の途上で明文化して法則化することは困難と判断した。

この上記 については、今年度さらに検討の余地があるため、研究開発の結果の全体を踏まえて考察できるよう留意した。

また、上記 は、第1学年(7単位)、第2学年(7単位)、第3学年(6単位)という極めて限られた授業時間を有効利用する具体的な手だてが課題である。

本年度は、指導内容の「大局的な類型化」(5 - (0) - {3}および{4}に示す)、およびトレーニング型の活動における「評価者」の拡張(5 - (0) - {8}に示す)を行い、『効率化』に貢献した。

指導の具体的な内容

今年度は、以上の考え方に基づき、「英語で議論できる効果的な発信能力を開発するためのステップアップ・プログラム」の第3案を作成し、これに基づいて指導実践と評価を行った。

なお、『指導法』の具体的な手続きについても、本校の指導スタッフによる詳細な記録が提出されている(資料編に掲載)。

表5-0-2-1

ステップアップ・プログラム (第3案)

広島市立舟入高等学校

型	課題	形態	活動の例	負荷の調節	主な負荷	目標値			1学年次 FORMATION			2学年次 CREATION			3学年次 ACCELERATION																
						1年	2年	3年	英語	オーラル	総合英語	英語	英語表現	異文化理解	英語理解	総合英語	コミュニケーション	通訳演習	英語表現	時事英語											
						3単位	2単位	2単位	3単位	2単位	2単位	3単位	2単位	2単位	2単位	3単位	2単位	1単位	2単位	2単位	2単位										
トレーニング型	音読	個人	音読(コーラス)	流暢さ ・原の大きさ ・発音の正確さ ・素材文(語彙・文法の増殖さ) 独断(バズ)	流暢さ	1年	120 wpm	2年	140 wpm	3年	160 wpm	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			独断(リポート)																												
			音読(シャドウ)																												
			独断(バズ)																												
	暗誦	個人	リスム・リーディング	流暢さ ・原の大きさ ・発音の正確さ ・素材文(語彙・文法の増殖さ)	流暢さ	1年	80 wpm	2年	90wpm	3年	100 wpm	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			グラマー・ディクテーション																												
			サイト・トランスレーション																												
	即興	ペア	リスニング・トランスレーション2	継続時間 ・ロジック ・トピック	継続時間	1年	2分	2年	3分	3年	4分	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			リード&ログアップ																												
			リスニング・トランスレーション3																												
イベント型	表現を充実させる	個人	個人学習ソフト	課題の量 語数 ・トピック ・制限時間	課題の量	1年	リスニング 800問	2年	リスニング 800問	3年	リスニング 800問	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		英語表現		時事英語							
			ライティング																												
	「書く」	個人・ペア	スピーチ	流暢さ ・発表時間 ・語数 ・トピック ・製作期間(時間)	流暢さ	1年	90 wpm	2年	100 wpm	3年	110 wpm	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			グループ																												
			ペア・グループ																												
	「書く」から「話す」へ	グループ	トークン・マッチ	流暢さ ・討論時間 ・トピック	流暢さ	1年	60 wpm	2年	70 wpm	3年	75 wpm	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			グループ																												
	「論証する」	グループ	ディベート	流暢さ ・ロジック ・トピック	流暢さ	1年	60 wpm	2年	70 wpm	3年	75 wpm	英語		総合英語		英語理解		総合英語		コミュニケーション		通訳演習		英語表現		時事英語					
			グループ																												

(3) 研究開発と指導実践の対応図【図5-0-3-1】および【表5-0-3-1】(次頁)

ステップアップ・プログラムの第3案(SUP3)を研究開発の課題、および本校の英語教育全体における位置づけは、図5-0-3-1、および表5-0-3-1に示される。

まず、研究内容は、申請時の研究内容に基づいて、以下のような分類を行っている。

しかしながら研究内容の1と2の指導フェーズの体系化については、昨年度の反省から、とくにFormation期のProductionに関する位置づけが十分に整理されていない。今年度の研究開発の成果に基づき再検討を必要とする部分である。

- ・ 研究内容1 ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究
 

Formation 期	語彙・文法の形成
Creation 期	ライティングとスピーキングの相乗効果
  
- ・ 研究内容2 スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究
 

Acceleration 期	「議論」に基づいたスピーキングのステップアップ
----------------	-------------------------
  
- ・ 研究内容3 指導評価シラバスの開発
 

Systematization	SUPの体系化と具体化
-----------------	-------------

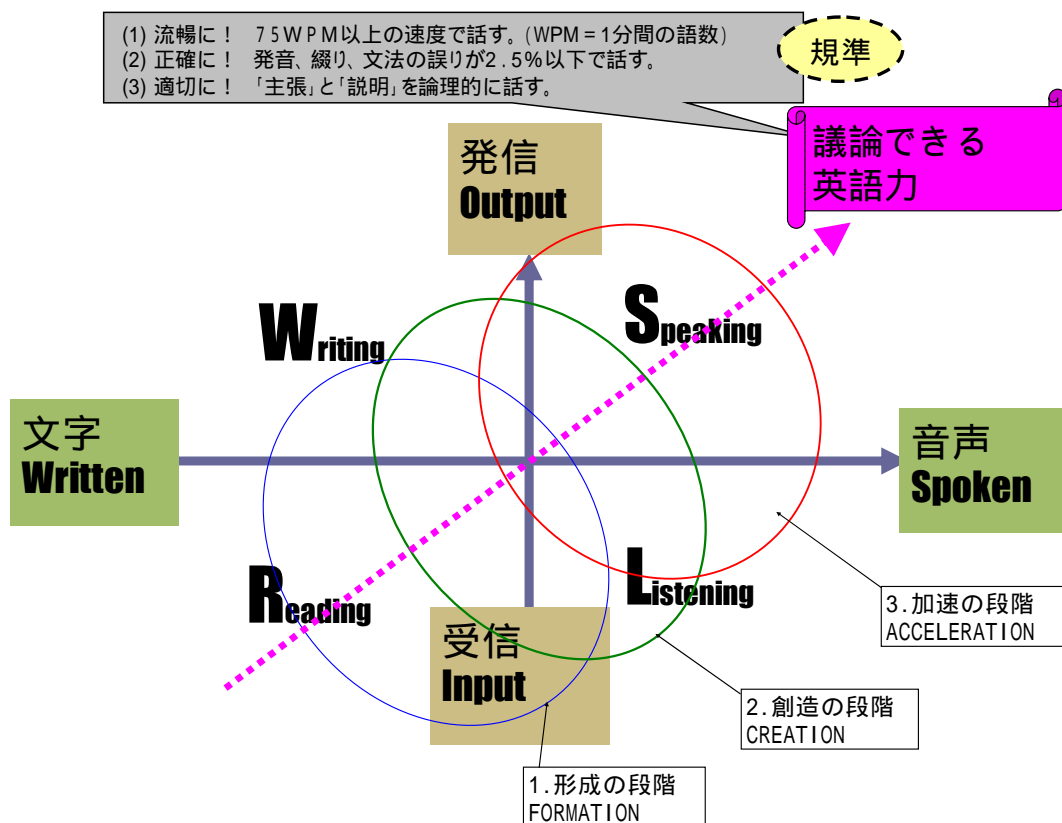


図5-0-3-1 ステップアップ・プログラム(SUP)と4技能との関係のイメージ

研究と指導実践の対応図

申請研究 研究番号 Study No.	研究主題 Subject	研究実践 Practice	「ねらい」(Objects)		「位置」(Sites & Steps)			「内容例」(Examples of Contents)			「目標値」(Standards)	
			イベント型 (EVENTS) 短期的な目標となる期間限定の体験活動	ディベート/ディスカッション Debate / Discussion	ライティング Writing	音読 Reading	暗誦 Reciting	即興 Speaking	語彙・文法 Vocab & grammar	リーディング Reading	リスニング Listening	従来型 (CONVENTIONAL) 文法知識の学習活動
研究内容1 Study 1	ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	【第1学年】 FORMATION (語彙文法の形成) ・ライティングとスピーキングの基礎力を充実のための指導と評価をする	「量」を重視して書く 「オーラル」 「ジャーナルライティング」 「エッセイライティング」 「Show & Tell」 「プレゼンテーション」の原稿	「思考」を高める。ロジックの大切さを知る 「総合的な学習の時間」 「小論文入門」 「日本語でのディベート」	「速読・流暢さ」を身につける 「英語」 「スピーチライティング」 「リスニング」 「リスニングマリーディング」	「暗誦」を徹底する 「総合英語」 「暗誦辞書」 「リーダー&リレクティブ」 「シャドローイング」 「サイトランスレーション」	「身近な出来事」について発話する 「オーラル」 「2分モ/ログ」(身近な話題) 「エッセイライティング」	「語彙」文法を正確にする(要領重視) 「全科目」 「教科書」 「文法辞書」 「単語」 「英辞林」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検準1級」	マクロロジック中心(トピック周辺)。 「ディスコース」 「ラフ」 「英語」 「教科書」 「長文問題集」 「速読問題集」	「量」に慣れる 「異文化理解」 「きゅっと」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」		
研究内容2 Study 2	スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	【第3学年】 ACCELERATION (自己表現の加速) ・議論に基づいたスピーキングのステップアップのための指導と評価をする	「量」を重視して書く 「英語表現」 「ピアリング」 「スピーチ」 「プレゼンテーション」の原稿	「思考」と「言語」を繋げる 「英語表現」 「簡易ディベート(各チームに1人1役し 助言をしながら行う)」	「理解と抑揚」を身につける 「英語」 「ドラマティック」 「テーゼ」 「フェイスバリエーション」 「ワンフレーズスピーチ」 「シャドローイング」 「プロンディーリーディング」	「暗誦」により理解を内面化する 「異文化理解」 「暗誦辞書」 「リーダー&リレクティブ」 「シャドローイング」 「サイトランスレーション」	「身近な出来事」か「賛否を論じる話」へ移行する 「英語表現」 「2分モ/ログ」(賛否ある話題) 「エッセイライティング」	「語彙」の充実と「文法」の正確さを極める(要領重視) 「全科目」 「教科書」 「文法辞書」 「単語」 「英辞林」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」	マクロロジック中心(和訳、説明、要約、選別) 「英語理解」 「総合英語」 「教科書」 「速読問題集」 「長文問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」	「量」に慣れる 「異文化理解」 「きゅっと」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」		
研究内容3 Study 3	指導評価「ラハ」の研究	【第1～3学年】 SYSTEMATIZATION (指導技法の体系化) ・SUPの具体化とそれに基づいた指導法と評価規程を含む「ラハ」の作成をする	「量」を重視して書く 「コミュニケーション」 「英単語」 「スピーチ」 「プレゼンテーション」 「エッセイライティング」 (ディベート論議のレビュー)	「議論」を楽しむ 「コミュニケーション」 「時事英語」 「ディベート」 「トーキングマッチ」 「ディスカッション」	「速読・流暢さ」かつ「理解と抑揚」のバランスを身につける 「英語理解」 「スピーチライティング」 「プロンディーリーディング」	「使用頻度の高い」表現を定着する 「総合英語」 「リスニング」 「スレーション」	「賛否を論じる話」へ移行する 「コミュニケーション」 「2分モ/ログ」(身近な話題) 「2分モ/ログ」(賛否ある話題) 「5分ライティング」	「語彙」の充実と「文法」の正確さを極める(要領重視) 「全科目」 「教科書」 「文法辞書」 「単語」 「英辞林」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」 「リスニング問題集」 「英検過去問」 「英検準1級」	「基礎トシ、筋トシ、体カづくり」(Basic training) 揺るぎない「英語力」 知識・理解の構築の場	「基礎トシ、筋トシ、体カづくり」(Basic training) 揺るぎない「英語力」 知識・理解の構築の場		





## (4) 指導段階の4類型化【表5 - 0 - 4 - 1】

研究開発の第2年次より導入した「トレーニング型」と「イベント型」の学習活動について、さらに教科の教育活動全体を網羅する視点から、「従来型」と「国際交流型」を加えて、以下の4つの類型(段階)について概念化した。表5 - 0 - 3 - 1では、～ について具体例を呈示している。

従来型(Conventional Type)	訳読、多読、精読、速読、文法、語彙増強などの従来、重視されてきた基礎的な学習活動。
<u>トレーニング型(Training Type)</u>	と を繋ぐための長期反復の訓練活動。
イベント型(Event Type)	ディベートやディスカッションなど短期の目標となる実践的コミュニケーションの体験活動。
国際交流型(International Type)	海外修学旅行、語学研修など、海外の人々と交流を持つなどの実践的な体験活動。

このような類型化を通じて明らかになることは次のことである。

例えばスポーツでは、基礎的な「筋力トレーニング」から、いきなり「練習試合」へと移行しても、おそらく「勝利」には繋がらない。「基礎体力」と「競技力」との橋渡しとなるトレーニングが必要であり、このようなトレーニングを通して、選手は自信をつけ、やる気を持続させることができる。

英語学習も同様に、従来行われていた訳読、多読、精読、速読、文法、語彙暗記などの「英語の基礎体力」をつける活動から、いきなりディベートやディスカッションなどの「実践的コミュニケーション」へと移行しても、やはり無理があることは否定できない。「基礎」から「実践」への橋渡しとなる「トレーニング」が必要である。

従って、研究開発の最終年度の最も大きな課題の一つは、「従来型」と「イベント型」とを橋渡しするための、「トレーニング型」の学習活動について検討するとともに、内容を具体的に記録し、今後の「継続と普及」へと導くことである。

表5 - 0 - 4 - 1 英語とスポーツの練習・指導段階の対比

STEP	英語学習 ENGLISH LEARNING	スポーツ SPORTS
	従来型 CONVENTIONALS	基礎練習 BASIC TRAINING
	トレーニング型 TRAININGS	フォーメーション練習 FORMATION TRAINING
	イベント型 EVENTS	練習試合 PRACTICE MATCH
	国際交流型 INTERNATIONAL	公式試合 REGULAR MATCH

## (5) トレーニング型の指導技法の3類型化【表5 - 0 - 5 - 1】

「トレーニング型」の学習活動は、研究開発の第二年次では、負荷を考慮して6段階の多様性のある類型を呈示した(音読・暗誦・通訳・英作・即興・議論の6類型、第2年次報告書14ページ)。

しかし、「『従来型』と『イベント型』との橋渡しであること(5 - (0) - (4))」、および「各授業科目への位置づけが容易であること」を考慮して、「音読(Reading)」「暗誦(Reciting)」「即興(Speaking)」の3要素へと再び単純化した。

その一方で、各トレーニング要素の「意義付け」と具体的な「活動内容」を明確化した。最も単純な意義付けは以下の通りである。

音読(Reading) 学習内容を顕在化。速さ(WPM)、正確さ(発音)、適切さ(プロソディ)を向上

暗誦(Reciting) 学習内容を内在化。Imitation から Production へと移行

即興(Speaking) 学習内容を自在化。Production を加速

さらに「トレーニング型」の3要素が、学習事態においてそれぞれ包含する3つの操作対象について整理した。その結果、表5 - 0 - 5 - 1に示す「Body・Mind・Spirit」あるいは「体育・知育・徳育」の視点を導入することで、トレーニング型の3要素が持つ「教育的な意義付け」と「必要な活動」を網羅的に呈示することができる。

発信技能を総合的な向上を図るには、表5 - 0 - 5 - 1に示される指導技法について、すべての領域を網羅できるように考慮することで、トレーニング型の学習活動がより効果的なものとなることが期待される。

表5 - 0 - 5 - 1 「トレーニング型」の3要素のパフォーマンスに必要な3つの「操作」

主な操作対象	音読 READING	暗誦 RECITING	即興 SPEAKING
<b>BODY</b> 「身体」 (身体を使う)	発音 スピード リズム マラソン音読	*	*
<b>MIND</b> 「言語」・「知識」 (語彙表現・文法を使う)	コンプリヘンション ディクテーション	サイト・トランスレー ション リスニング・トランス レーション	*
<b>SPIRIT</b> 「観念」・「理念」 (自分の思考や感情を表す)	プロソディー	プロソディー	1分モノログ (身近な話題) 2分モノログ トーキングマッチ (賛否両論の話題)

〔6〕「負荷」の種類とトレーニングの段階化 [表5 - 0 - 6 - 1][表5 - 0 - 6 - 2]

「トレーニング型」の学習活動において考慮すべき学習者の「負荷」

この考え方は、研究開発の第二年次より導入した。トレーニング型の要素を3つに限定したため、典型的な学習者の「負荷」は、表5 - 0 - 6 - 1に示すような段階となる。

表5 - 0 - 6 - 1 「トレーニング型」の3要素と「負荷」の位置づけ

	音読 READING	暗誦 RECITING	即興 SPEAKING
時間 TIME PRESSURE			
記憶 MEMORIZATION			
意見 OPINION FORMATION			
言語 LANGUAGE OPERATION			

また、具体的な活動内容に付随する「負荷」の種類は、表5 - 0 - 6 - 2に示される。この「負荷」を考慮することの意義は、最終的に以下の2点といえる。

どの部分の能力アップを目的とするのかを判断する際の指標となる  
適度な負荷を与えることで、無理のない能力アップが図れる

表5 - 0 - 6 - 2 トレーニング活動ごとの主要な「負荷」の種類

トレーニング活動		「負荷」の種類					
		素材	発音	記憶	時間	言語	意見
音読 READING	コーラス・リーディング	長文					
	バス・リーディング	長文					
	リピーティング	長文					
	シャドーイング	長文					
暗誦 RECITING	レシテーション・チェック	短文					
	リズム・リーディング	短文					
	リード&ルックアップ	長文					
	グラマー・ディクテーション	長文					
	サイト・トランスレーション	長文					
	サイト・トランスレーション	長文					
	リスニング・トランスレーション2	長文					
	リスニング・トランスレーション2	長文					
即興 SPEAKING	1分モノログ	身近					
	2分モノログ	賛否					
	リスニング・トランスレーション3	身近・賛否					
	リスニング・トランスレーション3	身近・賛否					
	トーキング・マッチ	賛否					

## 〔7〕トレーニング型の学習活動の授業科目における位置づけ【表5 - 0 - 7 - 1】

トレーニング型の学習活動の授業科目への位置づけ

トレーニング型の学習活動の授業科目への位置づけは、それぞれの活動において取り扱う素材を考慮して、音読はリーディング系(英語、英語、英語理解)、暗誦はライティング系(総合英語、異文化理解)、即興はコミュニケーション系(オーラル、英語表現、コミュニケーション)とした。

これは、それぞれの活動を以下のように捉えたからである。

---

「音読活動」 多様な英文、ストーリーやロジックのある内容を「顕在化」させるプロセス

「暗誦活動」 「記憶」の負荷を考慮して日常的に反復することにより、重要な表現やレトリックが「内在化」するプロセス

「即興活動」 内在化した言語表現を使用して自分自身あるいは集団の思考や感情に基づく意思疎通を「自在化」するプロセス

---

表5 - 0 - 7 - 1 トレーニング型の学習活動の授業科目における位置づけ

科目の系統	音読	暗誦	即興
リーディング系			
ライティング系			
コミュニケーション系			

## 〔8〕トレーニング型の学習活動における「評価者」【表5 - 0 - 8 - 1】

指導の効率化の問題

各段階での指導の「効率化」の問題に関して、今年度配慮したことの一つは、トレーニング型の活動における「評価者」について、自己評価(Self-evaluation)あるいは友人による評価(Peer-evaluation)の可能性を生かすよう試みたことである。

表5 - 0 - 8 - 1において、基本的に「F (Fluency)」は、「自分自身」あるいは「友人」による評価が可能である。とくに評価者として、友人の Speaking を「聞く」あるいは自分や友人の Writing を「読む」という活動を通して、自分自身の発信能力の改善に利用できるフィードバックを直ちに得ることができると同時に受信型技能における伸長も期待できる。

さらに小型のテープレコーダーを用いることで、自分自身での Speaking のチェック(S-F / L / G / P)がすべて可能となる。自宅学習を課すことで最大の効果が期待できる。

表5 - 0 - 8 - 1 トレーニング型の学習活動における「評価者」

学年	段階	自分	友人	ALT	JTL	PC
1 学年	FORMATION	W-F	S-F	S-L / P W-L / G	S-L W-L	Gyuto-e Listening
2 学年	CREATION	W-F	S-F W-L	S-L / P W-L / G	S-L W-L	Gyuto-e Listening
3 学年	ACCELERATION	W-F	S-F	S-L / P W-L / G	S-L W-L	Gyuto-e Listening

<u>SKILL</u>	-	<u>INDEX</u>
W = Writing		F = Fluency in Speed
S = Speaking		L = Appropriacy in Logic
		G = Accuracy in Grammar
		P = Accuracy in Pronunciation

## 〔9〕トレーニング型の学習活動の「大技」「小技」

「大技」「小技」の実践記録

トレーニング型の学習活動で行われた具体的な活動内容の目的と手続きおよび留意点は、資料編に掲載する。

これらの活動は、トレーニング型の3要素の位置づけに応じて、それぞれの授業担当者が科目ごとのねらいと生徒の状況を考慮して、独自に行ってきたものである。

〔10〕「英語による論証能力」を測定する WSA テスト

WSA テストについて

WSA テストは、研究開発における育成目標である「英語で議論できる効果的な発信能力(英語による論証能力)」を測定するため、**本校で独自に開発実施**している。

「英語による論証能力」は、「『身近だが賛否両論のある話題』について、自分の意見を『即興』で話す・書く力(論証能力)」と定義している。

WSA テストの具体的な「目的」「構成」および「手続き」は、平成17年度研究開発実施報告書の pp 15-22 に詳しく呈示してあるので、本稿では「概略」に留める。

WSA テストの概略

・ WSA テストの「目的」

生徒の能力の把握・・・議論する力を絶対評価で測定し、パフォーマンスの伸びを把握する  
 研究開発の評価・・・上記 に基づき、ステップアップ・プログラムおよび各指導法の適合度など、研究開発の正否を客観的に評価する

・ WSA テストの「構成」【図5 - 0 - 10 - 1】

テーマ・・・身近だが賛否両論のあるもの(インターネット、携帯電話、漫画など)  
 教示・・・テーマについて良い点2つ、悪い点2つ、自分の意見1つを話せ(書け)  
 形態・・・LL 教室での一斉テスト(筆記、及び録音)  
 順序・・・ライティング 15 分、2 分休憩、スピーキング 2 分。テーマ共通。  
 補助・・・辞書持込可。メモなどを見て話すことは不可。

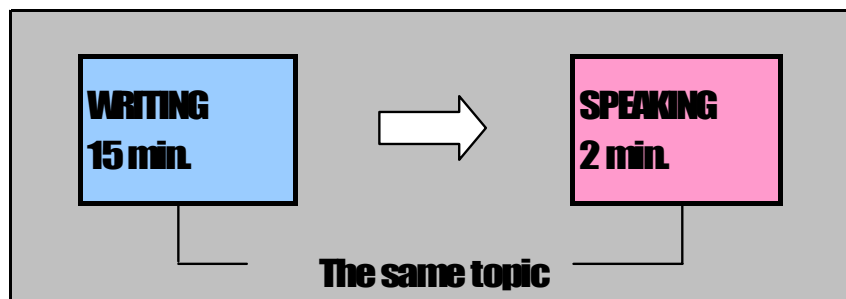


図5 - 0 - 10 - 1 WSA テストの構成

## ・ WSA テストの評価【表 5 - 0 - 10 - 1】

評価者・・・日本人教師(JTE)と外国人指導助手(AET)が連携して評価

評価指標・・・流暢さ(Fluency)、正確さ(Accuracy)、適切さ(Appropriacy)の3指標について、  
8つの観点で数値化

生徒へのフィードバック・・・上記 の数値による評価と併せて、これを基準として指標・観  
点ごとのA～Dまでの4段階評価および総合評価を返却

表 5 - 0 - 10 - 1 WSA テストの評価の指標と方法

評価の指標	数値化の観点		評定者		備考
			JTE	AET	
流暢さ	a. 総語数	W = 語/15分、 S = 語/2分			
	b. 書く速度	語毎分			
	c. 話す速度	語毎分			
	d. 総文数	文/15分			
正確さ	e. 誤綴り率	誤数/総語数			ライティングのみ
	f. 誤発音率	"			スピーキングのみ
	g. 誤文法率	"			
適切さ	h. 論理性	JTE(15点) + AET(15)点=計 (30点)			

## 〔11〕 純粋な即興発話の能力を測定する WSA+SA テスト

【表5 - 0 - 11 - 1】【図5 - 0 - 11 - 1】【図5 - 0 - 11 - 2】【図5 - 0 - 11 - 3】

残された課題

WSA テストについて、平成17年度(第二年次)の研究開発における課題として、以下のことが残された。

本研究開発では、英語による議論のための『即興発話(improvisation)』の能力を育成することに重点をおいているのでこの部分を厳密に評価する必要がある。

しかし、WSA テストで測定されるのは、『ある話題についてライティングをした後のスピーキングの能力』であり、これは improvisation ではなく、prepared の一種である。

この評価法に残された課題について、改善すれば、研究開発の成果を確実なものとして呈示することができる。

WSA+SA テストの基本となる考え方 【表5 - 0 - 11 - 1】【図5 - 0 - 11 - 1】

上記の課題を解決するため、WSA テストを変更し、新たに SA(Speaking for Argumentation)の部分を付加し、前半の WSA を『半即興(Semi-improvisation)』の部分、後半の SA を『純即興(Pure-improvisation)』の部分と定義した。

その基本となる考え方の詳細は、表5 - 0 - 11 - 1に示す。

表5 - 0 - 11 - 1 「ライティング」「間隔」「スピーキング」の順序でテストする場合のスピーキングの即興性

	ライティング Writing	間隔 Interval	スピーキング Speaking
純即興 Pure-improvisation	×なし	短時間・思考 (暗記不可能)	その場で考えて話す
半即興 Semi-improvisation	考えをまとめる	短時間・思考 (暗記不可能)	まとめた考えを話す
非即興 Non-improvisation (Prepared)	考えをまとめる	長時間・暗記	暗記した内容を話す



WSA+SA テストと WSA テストとの差異【図5 - 0 - 11 - 1】

- 目的・・・スピーキングについて WSA テストの「半即興」に加えて、WSA+SA テストでは新たに「純即興」を測定する
- 構成・・・WSA+SA テストでは、WSA テストの手続きに2分間のテーマ独立型のスピーキングテストを追加する
- 評価・・・評価指標および評価者は WSA テストの場合と同じ

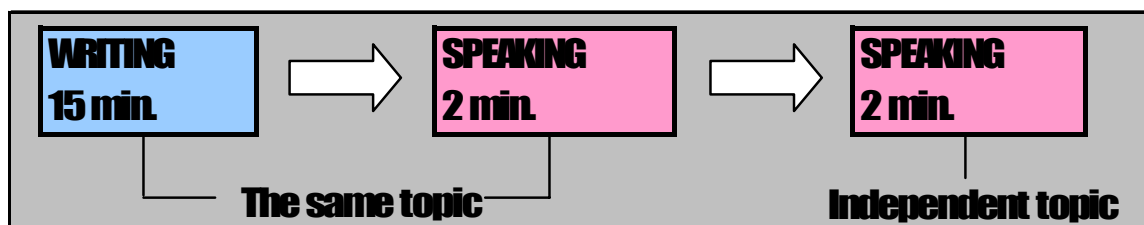


図5 - 0 - 11 - 1 WSA+SA テストの構成

即興発話の「維持率」【図5 - 0 - 11 - 2】

「維持率」は、「本当にいきなりはなせたのか」という即興性を証明する目安として使用する。今年度新たに WSA+SA テストを実施することによって得られる「純即興」のスピーキングの評価を使用して、以下の計算式で算出する。

$$\text{即興発話の「維持率」} = \text{「純即興」} / \text{「半即興」}$$

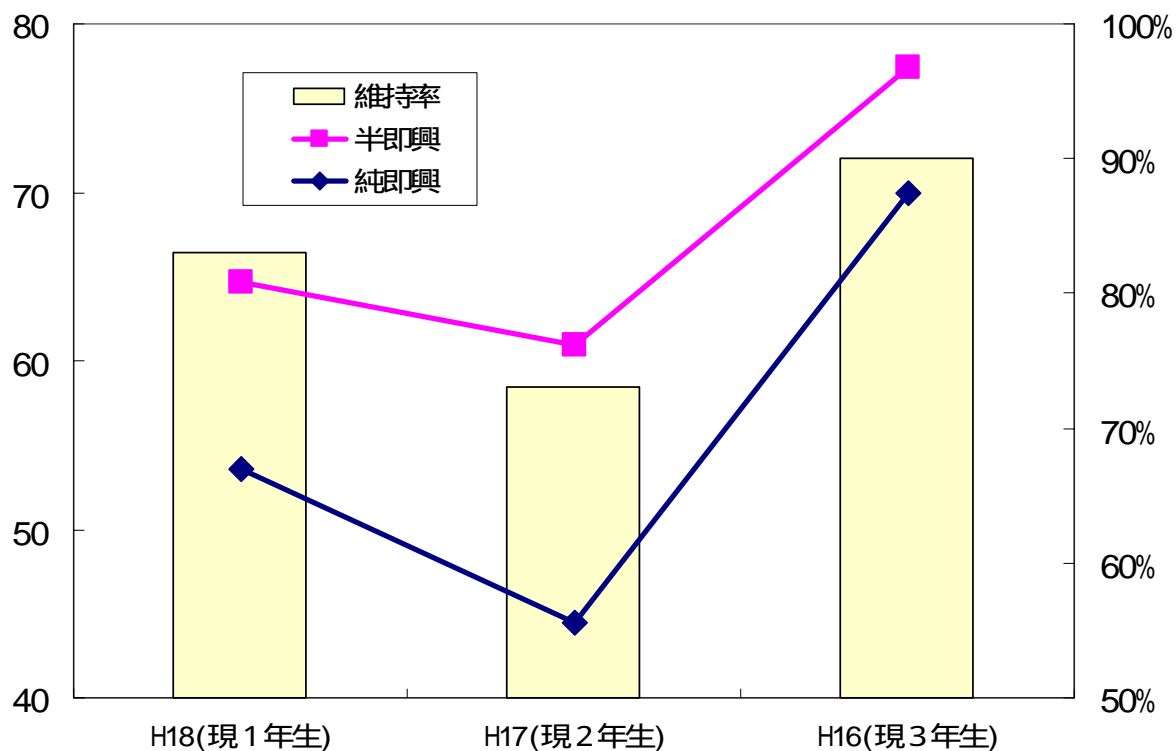


図5 - 0 - 11 - 2 SPEAKING の FLUENCY (WPM) における即興性の維持率 (平成 18 年 12 月実施)

WSA テストおよび WSA+SA テストの実施結果【図5 - 0 - 11 - 3】【表5 - 0 - 11 - 2】

WSA テストおよび WSA+SA テストによって、ライティング、スピーキング（半即興）、スピーキング（純即興）ごとに、Fluency(WPM)、Appropriacy(30 点満点)、Accuracy(エラー率)、および Index(Fluency × (Appropriacy / 30) × (1 - Accuracy))に関するデータが得られる(図5 - 0 - 11 - 3)。

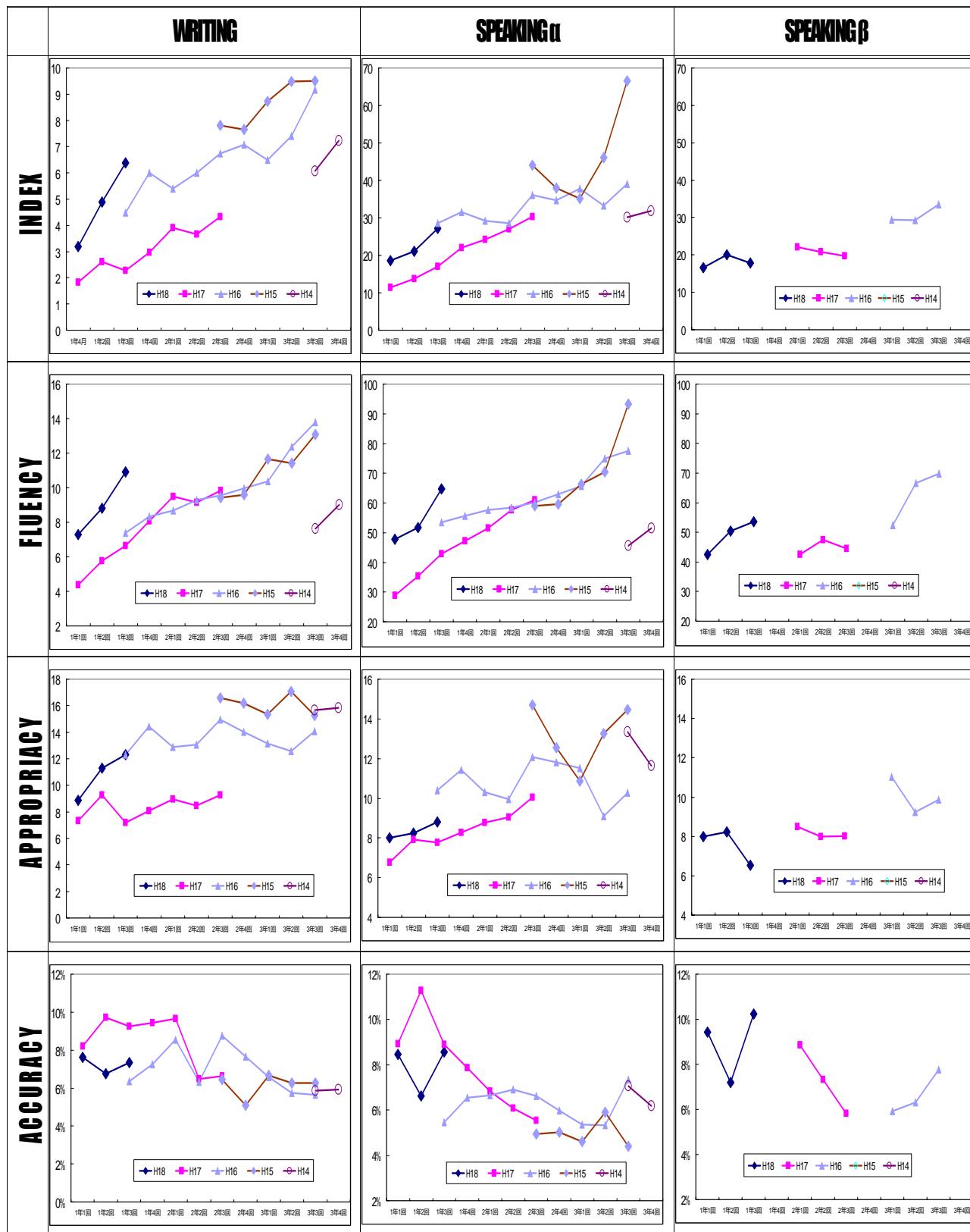


図5 - 0 - 11 - 2 SELHi 研究開発期間中の WSA テストおよび WSA+SA テストの全結果

## 今年度の指導成果の指標

今年度(平成18年度・研究開発第三年次)の指導を開始した4月と12月時点のWSA+SAテストに基づくパフォーマンスの変化について、表5-0-11-2に示し、後の分析において、生徒の能力の伸長度と研究開発の成果を評価するために使用する。

表5-0-11-2 平成18年度・第3年次の指導に基づくパフォーマンスの変化

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .1$ 

STUDENTS' GRADE	TIME	STATISTICS	WRITING					SPEAKING α SEMI-IMPROVISATION				SPEAKING β PURE-IMPROVISATION				INDICES		
			FLUENCY (WPM)	WORDS / SENTENCE	SPELLING ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	WRITING INDEX	SEMI-IMPROVISATION INDEX	PURE-IMPROVISATION INDEX
ALL	APR.	MEAN	9.0	10.7	0.9%	8.0%	10.2	54.5	0.2%	7.0%	9.3	45.5	0.3%	8.2%	9.1	4.4	26.4	22.3
		SD	2.6	2.6	1.0%	3.0%	3.7	18.7	0.7%	3.5%	4.2	22.1	0.7%	5.3%	4.0	2.5	22.4	23.8
		N	113	113	113	113	113	111	111	111	113	110	110	110	112	113	111	110
	DEC.	MEAN	11.5	12.9	0.9%	6.6%	11.9	67.8	0.4%	7.2%	9.7	56.1	1.6%	8.0%	8.1	6.7	32.2	23.6
		SD	3.1	3.2	1.1%	2.6%	3.7	20.2	2.1%	3.5%	3.5	23.0	5.2%	4.5%	4.0	3.4	20.9	20.5
		N	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114
	APR - DEC.	MEAN	2.6	2.2	0.0%	-1.4%	1.8	13.3	0.2%	0.2%	0.4	10.6	1.3%	-0.1%	-1.0	2.2	5.8	1.3
		t	6.6	5.8	0.1	3.8	3.5	5.1	0.8	0.5	0.7	3.5	2.7	0.2	1.8	5.6	2.0	0.4
		df	225	225	225	225	225	223	223	223	225	222	222	222	224	225	223	222
	SIG.	***	***		***	***	***				***	**		†	***	*		
1ST YEAR	APR.	MEAN	7.3	10.2	1.1%	7.6%	8.9	47.8	0.3%	8.5%	8.0	42.5	0.2%	9.4%	8.0	3.2	18.6	16.5
		SD	2.4	2.6	1.2%	2.7%	3.2	14.7	0.6%	2.8%	2.8	15.7	0.5%	4.3%	3.0	1.9	10.1	10.9
		N	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
	DEC.	MEAN	10.9	13.3	1.4%	7.3%	12.3	64.7	0.9%	8.6%	8.8	53.6	3.1%	10.2%	6.5	6.4	27.3	17.8
		SD	3.2	3.6	1.4%	2.8%	3.3	20.9	3.4%	2.4%	3.1	22.6	8.6%	5.2%	3.6	3.3	17.7	18.1
		N	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
	APR - DEC.	MEAN	3.6	3.1	0.4%	-0.3%	3.5	16.9	0.6%	0.1%	0.8	11.2	2.8%	0.8%	-1.5	3.2	8.7	1.2
		t	5.8	4.4	1.2	0.4	4.7	4.1	1.1	0.1	1.2	2.5	2.1	0.7	2.0	5.2	2.7	0.4
		df	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78
	SIG.	***	***			***	***				*	*		†	***	**		
2ND YEAR	APR.	MEAN	9.5	10.4	0.9%	9.6%	9.0	51.4	0.1%	6.8%	8.8	42.5	0.3%	8.9%	8.5	3.9	24.2	22.0
		SD	2.2	2.7	0.9%	3.3%	2.2	19.6	0.6%	4.2%	4.2	30.5	0.9%	6.9%	4.2	1.5	27.4	34.4
		N	39	39	39	39	39	37	37	37	39	36	36	36	38	39	37	36
	DEC.	MEAN	10.2	12.3	0.4%	6.5%	10.3	64.0	0.1%	5.3%	10.7	47.9	0.8%	5.4%	8.4	5.2	35.1	22.7
		SD	2.9	3.4	0.5%	2.5%	4.2	19.5	0.5%	4.3%	4.1	23.3	1.2%	4.1%	4.5	3.3	25.5	22.9
		N	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
	APR - DEC.	MEAN	0.7	1.9	-0.5%	-3.2%	1.3	12.6	0.0%	-1.5%	2.0	5.5	0.5%	-3.4%	-0.1	1.3	10.9	0.7
		t	1.3	2.7	2.9	4.7	1.7	2.8	0.0	1.6	2.1	0.9	2.0	2.6	0.1	2.2	1.8	0.1
		df	77	77	77	77	77	75	75	75	77	74	74	74	76	77	75	74
	SIG.		**	**	***	†	**			*		*	*		*	†		
3RD YEAR	APR.	MEAN	10.4	11.6	0.7%	6.6%	13.1	65.7	0.4%	5.4%	11.5	52.4	0.3%	5.9%	11.0	6.5	37.8	29.4
		SD	2.3	2.3	0.9%	2.2%	3.9	17.2	1.0%	2.5%	4.8	16.5	0.8%	3.6%	4.1	2.7	22.8	19.7
		N	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34
	DEC.	MEAN	13.8	13.2	0.9%	5.7%	13.4	75.8	0.3%	7.9%	9.5	68.8	0.9%	8.5%	9.6	8.8	34.5	31.6
		SD	2.1	2.2	1.1%	2.3%	2.9	18.4	0.9%	2.2%	2.7	17.6	1.3%	2.2%	2.9	2.7	17.6	18.0
		N	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34
	APR - DEC.	MEAN	3.4	1.6	0.1%	-0.8%	0.3	10.1	-0.1%	2.5%	-2.0	16.4	0.6%	2.5%	-1.4	2.3	-3.3	2.2
		t	6.3	2.9	0.6	1.5	0.3	2.3	0.6	4.4	2.1	3.9	2.2	3.5	1.6	3.4	0.7	0.5
		df	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66
	SIG.	***	**				*		***	*	***	*	***		**			

## (1) ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究

## (1) 第1学年 形成期の指導(Formation 期:ライティングとスピーキングの基礎となる時期)

Formation 期の意義と位置づけ

Formation期は、1年生に対して、議論における効果的な発信能力を育成するための基礎となるリスニング、リーディング、語彙、文法などインプット型のスキルと言語知識の充実に重点をおく。そして、このことを留意して、シラバスの作成と実際の指導を行っている。

一方、昨年度(平成 17 年度 第二年次)からは、ディベートやディスカッションなどの実践的コミュニケーション活動への移行を円滑にすることを目的として、「トレーニング型」の学習活動を導入し、その成果を評価してきた。

Formation 期の課題となっていたこと

昨年度(平成 17 年度 第二年次)の研究開発の結果から、以下のことがわかっている。

「Formation 期には、トレーニング型の学習活動を通してライティング、スピーキングともに『流暢さ』が向上する。

しかし、『正確さ』『適切さ』の向上は必ずしも伴わない。」

これに対しては、次の3つの対処が考えられる。

向上しやすい『流暢さ』の育成を重視する  
『正確さ』『適切さ』の育成に重点を移す  
上記 のバランスを重視する

改善の方針

これら3つのうち、は最も理想的である。しかし、生徒の能力資源には限りがあり、とくに学習の初期においては、まず「得意分野」を伸ばすことによって「自信」と「やる気」を育成することが肝要と考えた。

また、は一般的に指摘されている生徒の情意面への配慮、すなわち「Accuracy を重視しすぎると話せなくなる」ことへの配慮や、身近な内容についての発信が行われる時期の指導であるため、議論における Appropriacy が指導の中心となる段階ではないと判断した。

従って、今年度 Formation 期には以下の点をとくに留意した。

「さらに『流暢さ( )』の育成を重視して指導を行う」

FORMATION 期の指導の結果[表5 - 1 - 1 - 1][図5 - 1 - 1 - 1][図5 - 1 - 1 - 2]

表5 - 1 - 1 - 1 指導の前後におけるパフォーマンスの変化(WSA+SA テストに基づく)

( …有意に伸長、 …有意に下降、それぞれ  $p < .05$ )

STUDENTS GRADE	TIME	STATISTICS	WRITING					SPEAKING α SEMI-IMPROVISATION				SPEAKING β PURE-IMPROVISATION				INDICES		
			FLUENCY (WPM)	WORDS / SENTENCE	SPELLING ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	WRITING INDEX	SEMI-IMPROVISATION INDEX	PURE-IMPROVISATION INDEX
ALL	APR.	MEAN	9.0	10.7	0.9%	8.0%	10.2	54.5	0.2%	7.0%	9.3	45.5	0.3%	8.2%	9.1	4.4	26.4	22.3
	DEC.	MEAN	11.5	12.9	0.9%	6.6%	11.9	67.8	0.4%	7.2%	9.7	56.1	1.6%	8.0%	8.1	6.7	32.2	23.6
		SIG.																
1ST YEAR	APR.	MEAN	7.3	10.2	1.1%	7.6%	8.9	47.8	0.3%	8.5%	8.0	42.5	0.2%	9.4%	8.0	3.2	18.6	16.5
	DEC.	MEAN	10.9	13.3	1.4%	7.3%	12.3	64.7	0.9%	8.6%	8.8	53.6	3.1%	10.2%	6.5	6.4	27.3	17.8
		SIG.																
2ND YEAR	APR.	MEAN	9.5	10.4	0.9%	9.6%	9.0	51.4	0.1%	6.8%	8.8	42.5	0.3%	8.9%	8.5	3.9	24.2	22.0
	DEC.	MEAN	10.2	12.3	0.4%	6.5%	10.3	64.0	0.1%	5.3%	10.7	47.9	0.8%	5.4%	8.4	5.2	35.1	22.7
		SIG.																
3RD YEAR	APR.	MEAN	10.4	11.6	0.7%	6.6%	13.1	65.7	0.4%	5.4%	11.5	52.4	0.3%	5.9%	11.0	6.5	37.8	29.4
	DEC.	MEAN	13.8	13.2	0.9%	5.7%	13.4	75.8	0.3%	7.9%	9.5	68.8	0.9%	8.5%	9.6	8.8	34.5	31.6
		SIG.																

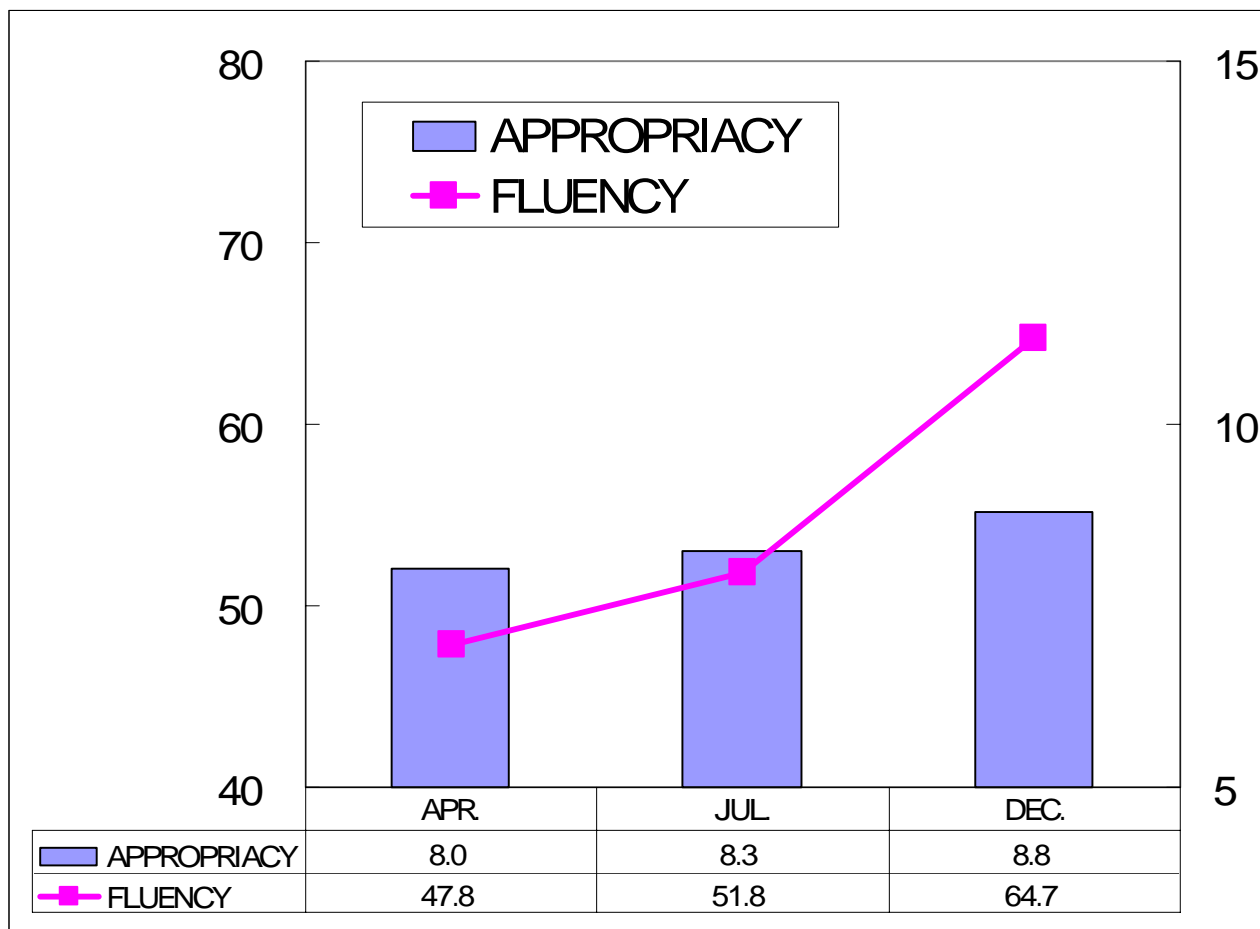


図5 - 1 - 1 - 1 SPEAKING における FLUENCY と APPROPRIACY の変化(第1学年)

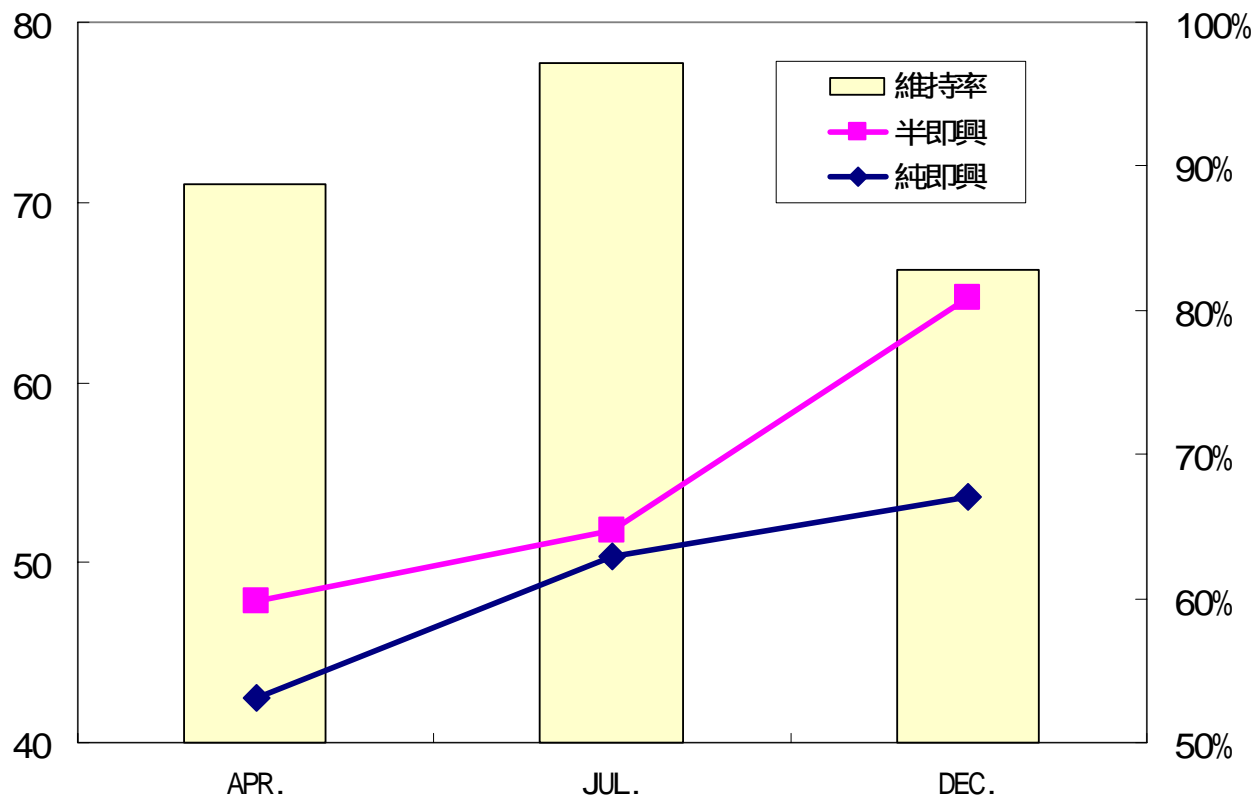


図5 - 1 - 2 - 2 SPEAKING と における FLUENCY の比較による即興性の維持率 (第1学年)

## ステップアップ・レポート

担当教諭

福崎 穰司

近藤あゆみ

第 1 学年	国際コミュニケーション	科目名:	OC
--------	-------------	------	----

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 60 wpm
イベント型	プレゼンテーション、スピーチ、ディスカッション		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の平均値	音読	***	wpm	***	wpm
	暗誦	***	wpm	***	wpm
	即興	51.7	wpm	63.2	wpm
トレーニング (長期反復)型	活動内容	プレゼンテーション(各グループに分かれてオブジェでもってコマースルをする) リスニングと発音ドリル(アクセント、シラブル 紛らわしい単語の発音) スピーチ(自由なテーマで5分間のスピーチ)		評価方法	ALTとJTLによる評価(基準の評価用紙に記入) プレゼンテーションを視聴し、生徒が評価する。
	活動内容	2分間モノログスピーキング リスニングと発音ドリル(アクセント、シラブル 紛らわしい単語の発音) スピーチ(自由なテーマで5分間のスピーチ) ディスカッション		評価方法	ALTとJTLによる評価(基準の評価用紙に記入) プレゼンテーションを視聴し、生徒が評価する。
イベント (短期体験)型	活動内容	プレゼンテーション スピーチ		評価方法	ALTとJTLによる評価(基準の評価用紙に記入) ワークシート、授業の参加態度や発表内容による評価
	活動内容	ワークシート、授業の参加態度や発表内容による評価		活動内容	プレゼンテーション スピーチ ディスカッション
標準的な授業プロセス	導入 リスニングと発音ドリル ディスカッション・リーディング まとめ			導入 リスニングとスピーチ ディスカッション・リーディング まとめ	

## ステップアップ・レポート

担当教諭

近藤 あゆみ

西 巖弘

第 1 学年	国際コミュニケーション	科目名:	英語
--------	-------------	------	----

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読	120	wpm	暗誦	***	wpm	即興	***	wpm
イベント型									

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の平均値	音読	105	wpm	120	wpm
	暗誦	60	wpm	***	wpm
	即興	***	wpm	55	wpm
トレーニング (長期反復)型	活動内容	評価方法		活動内容	評価方法
	<ul style="list-style-type: none"> <li>1分間モノログ</li> <li>ディクテーション</li> <li>ペア和訳</li> <li>スラッシュ・リーディング</li> <li>オーバーラッピング</li> <li>シャドーイング</li> <li>キーセンテンスからテキストのreproduction</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアがフードカウンターで語数を計測 warm up evaluation sheet に点数を記載</li> <li>ディクテーションしたものを自己評価</li> <li>ペア、教員による和訳の確認</li> <li>自己評価</li> <li>全体で発音することで定着していない文を自己評価する</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1分間モノログ</li> <li>英問英答</li> <li>英文和訳による内容理解</li> <li>オーバーラッピング</li> <li>シャドーイング</li> <li>1分間速読</li> <li>サマライゼーション</li> <li>文法・ディクテーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアがフードカウンターで語数を計測 warm up evaluation sheet に点数を記載</li> <li>自己評価</li> <li>ペア、教員による和訳の確認</li> <li>自己評価</li> <li>ペアによる評価</li> <li>自己評価</li> </ul>
イベント (短期体験)型	活動内容	評価方法		活動内容	評価方法
	<ul style="list-style-type: none"> <li>communication workshopの発表</li> <li>WSA</li> <li>スラッシュ和訳を教師担当に発表(1課につき1回)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループごとの評価</li> <li>ALT、JTEIによる共同評価</li> <li>JTEIによる評価</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>communication workshopの発表</li> <li>WSA</li> <li>自己表現活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループごとの評価</li> <li>ALT、JTEIによる共同評価</li> <li>JTEIによる評価</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>1分間モノログ</li> <li>ディクテーション</li> <li>和訳 セグメント判断の確認</li> <li>音読</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペア、JTEIによる評価(ワークシート、授業の参加態度や発言による評価)</li> <li>自己評価</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1分間モノログ</li> <li>英問英答</li> <li>英文和訳・指示語の理解</li> <li>パラグラフ・リーディング</li> <li>音読</li> <li>サマライゼーション</li> <li>文法ディクテーション</li> </ul>	



## ステップアップ・レポート

担当教諭

福崎 穰司

為西 正和

第 1 学年	国際コミュニケーション	科目名:	総合英語
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 105 wpm	暗誦 60 wpm	即興 100 wpm
イベント型	音読 暗唱		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の平均値	音読	90	wpm	100	wpm
	暗誦	50	wpm	60	wpm
	即興	***	wpm	60	wpm
トレーニング (長期反復)型	活動内容	教科書の基本例文となる英文法を理解させ、習得し、暗唱させる。その際、速度、イントネーション、発音そして、リズムなどに注意しながら暗唱させる。		評価方法	観察と定期考査 JTE、生徒同士による評価(パートナーが暗唱しているかどうか評価)
	活動内容	教科書の基本例文となる英文法を理解させ、習得し、暗唱させる。教科書に準拠した例文の暗誦、イディオムを用いた自由英作文		評価方法	観察と定期考査 JTE、生徒同士による評価(パートナーが暗唱しているかどうか評価)
イベント (短期体験)型	活動内容	プレゼンテーション		活動内容	音読 暗誦 プレゼンテーション
	評価方法	暗唱しているかどうか、生徒による評価 JTEによる暗唱評価		評価方法	暗唱しているかどうか、生徒による評価 JTEによる暗唱評価
標準的な授業プロセス	導入 音読 暗唱 プレゼンテーション			導入 音読 暗唱 プレゼンテーション	

## 〔2〕第2学年 創造期の指導(Creation 期:ライティングとスピーキングの相乗効果による発展の時期)

Creation 期の意義と位置づけ

Creation期は、2年生に対して、エッセイ・ライティング、アカデミック・ライティング、パブリック・スピーチ、プレゼンテーションなど、Formation期の言語知識を土台として、「書く」活動をベースに、「書く」と「話す」を繰り返し、AccuracyとAppropriacyを備えた発話へと繋げることを目標としている。そして、このことを留意して、シラバスの作成と実際の指導を行っている。

Creation 期の課題となっていたこと

昨年度(平成17年度 第二年次)の研究開発の結果から、以下のことがわかっている。

---

「Creation 期には、ライティングとスピーキングの反復トレーニングを通して、書くことに慣れ、ライティングの『流暢さ』が向上する。また、書いた内容を精査する活動を通して、『適切さ』が向上する。しかし、『正確さ』の向上、あるいはスピーキングの『流暢さ』の向上は必ずしも伴わない。」

---

これに対しては、次のような対処が考えられる。

能力指標のすべてが向上することは理想的である。

しかし、本来の位置づけとして、自分のアイデアや意見を生成して発信するための『正確さ』と『適切さ』を向上させることを主眼とする指導段階であり、『流暢さ』が著しく損なわれない限り、『正確さ』と『適切さ』の涵養が優先されるべきである。

改善の方針

昨年度(平成17年度 第二年次)の研究開発の結果と、Creation 期の位置づけを比較して、昨年度『正確さ』の向上が十分でなかったことと、主眼である『適切さ』の向上をさらに確実にする必要がある。

従って、今年度 Creation 期には、以下の点を留意した。

---

「さらに『正確さ』と『適切さ』の育成を重視して指導を行う」

---

CREATION 期の指導の結果 [表 5 - 1 - 2 - 1] [図 5 - 1 - 2 - 1] [図 5 - 1 - 2 - 2]

表 5 - 1 - 1 - 1 指導の前後におけるパフォーマンスの変化 (WSA+SA テストに基づく)

( …有意に伸長、 …有意に下降、それぞれ  $p < .05$ )

STUDENTS' GRADE	TIME	STATISTICS	WRITING					SPEAKING α SEMI-IMPROVISATION				SPEAKING β PURE-IMPROVISATION				INDICES		
			FLUENCY (WPM)	WORDS / SENTENCE	SPELLING ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	WRITING INDEX	SEMI-IMPROVISATION INDEX	PURE-IMPROVISATION INDEX
ALL	APR.	MEAN	9.0	10.7	0.9%	8.0%	10.2	54.5	0.2%	7.0%	9.3	45.5	0.3%	8.2%	9.1	4.4	26.4	22.3
	DEC.	MEAN	11.5	12.9	0.9%	6.6%	11.9	67.8	0.4%	7.2%	9.7	56.1	1.6%	8.0%	8.1	6.7	32.2	23.6
		SIG.																
1ST YEAR	APR.	MEAN	7.3	10.2	1.1%	7.6%	8.9	47.8	0.3%	8.5%	8.0	42.5	0.2%	9.4%	8.0	3.2	18.6	16.5
	DEC.	MEAN	10.9	13.3	1.4%	7.3%	12.3	64.7	0.9%	8.6%	8.8	53.6	3.1%	10.2%	6.5	6.4	27.3	17.8
		SIG.																
2ND YEAR	APR.	MEAN	9.5	10.4	0.9%	9.6%	9.0	51.4	0.1%	6.8%	8.8	42.5	0.3%	8.9%	8.5	3.9	24.2	22.0
	DEC.	MEAN	10.2	12.3	0.4%	6.5%	10.3	64.0	0.1%	5.3%	10.7	47.9	0.8%	5.4%	8.4	5.2	35.1	22.7
		SIG.																
3RD YEAR	APR.	MEAN	10.4	11.6	0.7%	6.6%	13.1	65.7	0.4%	5.4%	11.5	52.4	0.3%	5.9%	11.0	6.5	37.8	29.4
	DEC.	MEAN	13.8	13.2	0.9%	5.7%	13.4	75.8	0.3%	7.9%	9.5	68.8	0.9%	8.5%	9.6	8.8	34.5	31.6
		SIG.																

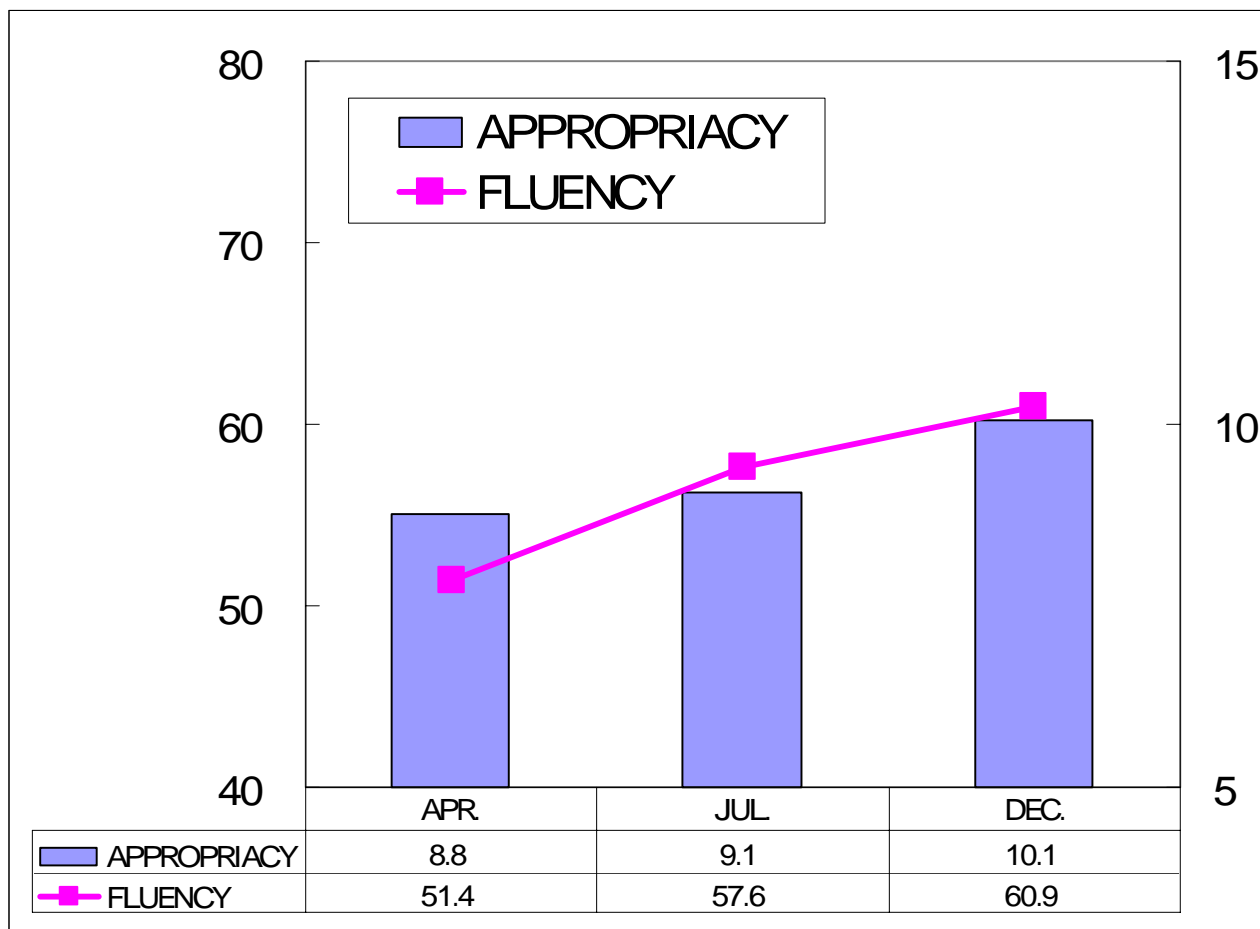


図 5 - 1 - 2 - 1 SPEAKING における FLUENCY と APPROPRIACY の変化 (第 2 学年)

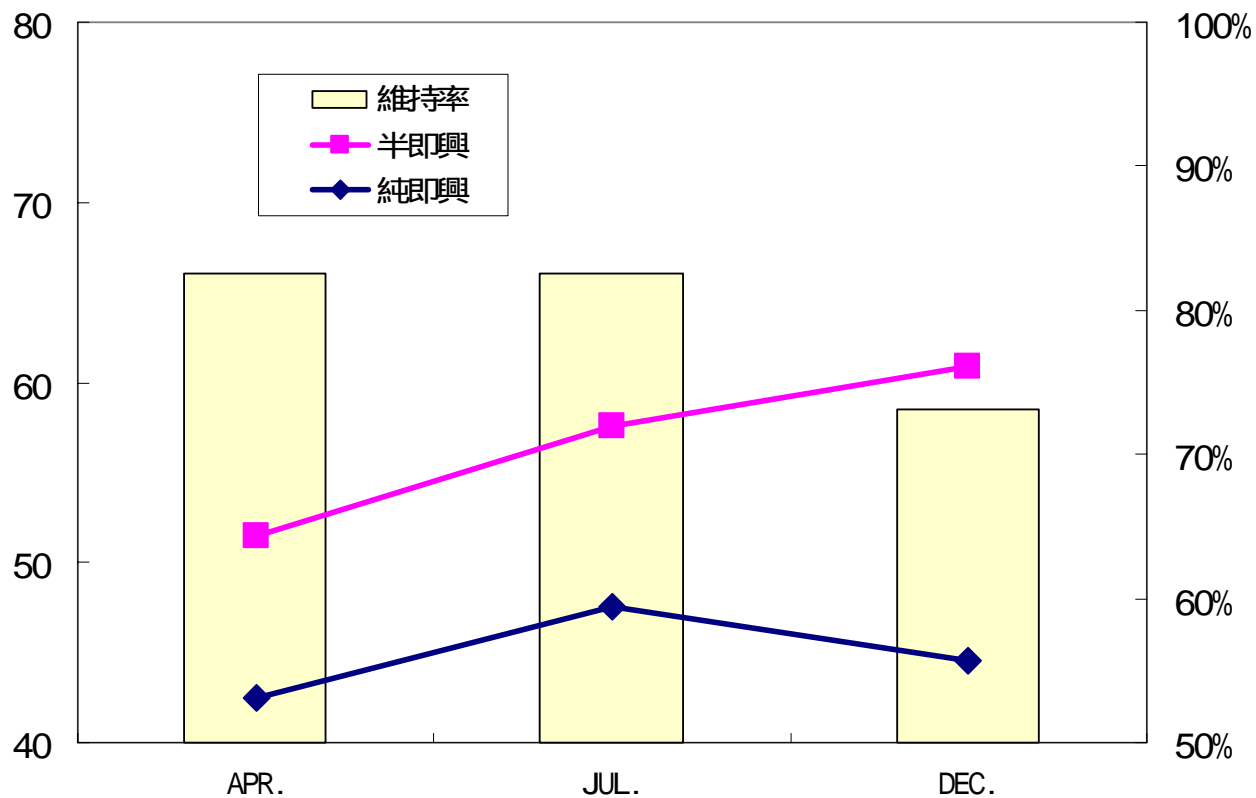


図5 - 1 - 2 - 2 SPEAKING と における FLUENCY の比較による即興性の維持率 (第2学年)

## ステップアップ・レポート

担当教諭

佐々木 百合子

住田 恒三

第 2 学年	国際コミュニケーション	科目名:	英語
--------	-------------	------	----

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読	140	wpm	暗誦	***	wpm	即興	***	wpm
イベント型									

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の 平均 値	音読	***	wpm	***	wpm
	暗誦	***	wpm	***	wpm
	即興	***	wpm	***	wpm
トレーニング (長期反復) 型	活動内容	前時学習内容のディクテーション 予習テスト(新出単語・要約・英問英和答) クローズドテスト 英字新聞精読		評価方法	自己採点 交換採点 担当教員による採点
	活動内容	前時学習内容のディクテーション 予習テスト(新出単語・要約・英問英和答) クローズドテスト 英字新聞精読 シャドーイング		評価方法	自己採点 交換採点 担当教員による採点
イベント (短期体験) 型	活動内容			評価方法	
	活動内容			評価方法	
標準的な 授業プロセス	活動内容	ディクテーションによる復習 予習テスト・チェック 新しい内容の導入 リピーティング(教科書を見ないで) 内容把握 リピーティング(教科書を見ないで)		評価方法	自己採点 交換採点 担当教員による採点
	活動内容	ディクテーションによる復習 予習テスト・チェック 新しい内容の導入 リピーティング(教科書を見ないで) 内容把握 リピーティング(教科書を見ないで) シャドーイング		評価方法	自己採点 交換採点 担当教員による採点

## ステップアップ・レポート

担当教諭

佐藤

万力

第 2 学年	国際コミュニケーション	科目名:	英語表現
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 70 wpm
イベント型			

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の平均値	音読	***	wpm	***	wpm
	暗誦	***	wpm	***	wpm
	即興	57.5	wpm	69.4	wpm
トレーニング (長期反復)型	活動内容	評価方法		活動内容	評価方法
	2分間モノログ (身近な題材についてのモノログ、ペアワークで相互にサマライズしてクラス全体にレポート)  グループ・ディスカッション (題材: Impact Issueより Why Learn English?, Forever Single, Having a Pet, Helping Others)			2分間モノログ (身近な題材についてのモノログ、ペアワークで相互にサマライズしてクラス全体にレポート)  スピーチ・プラクティス (Short Paragraph を「相手に伝えること」を意識して、様々な読み方をさせる。One-Breath Readingなど)	
イベント (短期体験)型	活動内容	評価方法		活動内容	評価方法
	Group Presentation (Topic: Why We Respect..) Impromptu Speech Activity on Speaking, using materials from e-lesson: 1) An Unsinkable Legend 2) Find Out 3) Look Back 4) Haunted House in England 5) Solving Mysteries	相互に評価 ALTによる評価		Public Speech	相互に評価 ALTによる評価
標準的な 授業プロセス	2-minute dialogue Activity on Speaking in Group Consolidation (normally Reporting to the whole class)		2-minute dialogue Activity on Speaking in Group Consolidation (normally Reporting to the whole class)		

## ステップアップ・レポート

担当教諭

大嶋 淳二

栗栖 五代

第 2 学年	国際コミュニケーション	科目名:	異文化理解
--------	-------------	------	-------

## 【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読	140	wpm	暗誦	***	wpm	即興	***	wpm
イベント型									

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期		
生徒の平均値	音読	135	wpm	140	wpm	
	暗誦	***	wpm	***	wpm	
	即興	***	wpm	***	wpm	
トレーニング (長期反復) 型	活動内容	・リスニングテスト ・ディクテーション ・英問英答 ・リピ - ティング ・シャドウイング ・オーバーラッピング ・フラスワンダイアログ ・市立大学の個人学習ソフトを使ったリスニング	・自己評価 ・自己評価 ・教員評価 ・教員評価 ・教員/全体評価 ・教員評価 ・全体評価 ・自覚評価	活動内容	・発音矯正ソフト『Pronunciation Power』 ・ディクテーション ・英問英答 ・リピ - ティング ・シャドウイング ・オーバーラッピング ・フラスワンダイアログ ・市立大学の個人学習ソフトを使ったリスニング	・教員評価 ・自己評価 ・教員評価 ・教員評価 ・教員/全体評価 ・教員評価 ・全体評価 ・自覚評価
	イベント (短期体験) 型	活動内容	・マザーグースのメロノーム読み ・映画(ハリー・ポッター)のディクテーションと視聴 ・スキットコンペティション(ペア活動・ビデオ撮影)	・全体評価 ・自己評価 ・相互評価	活動内容	・映画(ベイブ)の正誤問題(TF)と視聴 ・英語の歌の聞き取り
標準的な授業プロセス	Day 1	リスニングテスト ディクテーション 英問英答 リピ - ティング・シャドウイング・オーバーラッピング フラスワンダイアログ		Day 1	発音矯正ソフト『Pronunciation Power』 ディクテーション 英問英答 リピ - ティング・シャドウイング・オーバーラッピング フラスワンダイアログ	
	Day 2	市立大学の個人学習ソフトを使ったリスニング		Day 2	市立大学の個人学習ソフトを使ったリスニング	

## (2) スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究

## (1) 第3学年 加速期の指導(Acceleration 期:「議論」に基づく「スピーキング」のステップアップの時期)

Acceleration 期の意義と位置づけ

Acceleration期は、3年生に対して、5分間ライティング、1分間モノログ、2分間モノログ、トーキング・マッチなど、time pressureを明確にした活動を通して、Fluencyを限りなく伸ばすとともに、実践的な Appropriacyを醸成しつつ、「素早く発信する力」を育成することに重点をおく。そして、このことを留意してシラバスの作成と実際の指導を行っている。

Accelerarion 期の課題となっていたこと

昨年度(平成17年度 第二年次)の研究開発の結果から、以下のことがわかっている。

---

「Acceleration 期には、『流暢さ』の育成をねらったトレーニング型の学習活動と、logical な意思疎通が求められるディベートなどのイベント型の学習活動の相乗効果で、『流暢さ』と『適切さ』をともに高めることができる。

しかし、3年間の指導の最終段階にいたって、『正確さ』の向上は必ずしも伴わない。」

---

これに対しては、次のことが考えられる。

「量(Fluency)」と「質(Accuracy, Appropriacy)」とがトレードオフの関係にあることは、昨年度から大きな課題となっていた。

しかし、もし「質」と「量」をともに伸ばすという目標を設定するとすれば、一つの授業の中に2つの異なるねらいが混在することになる。やはり、生徒の学習のための能力資源が限られていることを考慮すれば、どちらか一方に重点をおく指導の方が適切と考える。

また、Acceleration 期の生徒は、すでに Creation 期の指導を通じて「質」を高めている。

しかし、議論するために必要な『流暢さ(WPM)』については、さらにトレーニングすることが求められる段階である。

改善の方針

昨年度(平成17年度 第二年次)の研究開発の結果と、Acceleration 期の位置づけ、そして「質」と「量」のバランスを考慮して、「議論できる発信能力」の育成を確実にする必要がある。

従って、今年度 Acceleration 期には、以下の点を留意した。

---

『正確さ』と『適切さ』を維持しつつ、さらに『流暢さ』の育成を重視して指導を行う

---



ACCELERATION 期の指導の結果 [表5 - 2 - 1 - 1] [図5 - 2 - 1 - 1] [図5 - 2 - 1 - 2]

表5 - 2 - 1 - 1 指導の前後におけるパフォーマンスの変化 (WSA+SA テストに基づく)  
 ( …有意に伸長、 …有意に下降、それぞれ  $p < .05$ )

STUDENTS' GRADE	TIME	STATISTICS	WRITING					SPEAKING α SEMI-IMPROVISATION				SPEAKING β PURE-IMPROVISATION				INDICES		
			FLUENCY (WPM)	WORDS / SENTENCE	SPELLING ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	FLUENCY (WPM)	PRONUNCIATION ERROR	GRAMMATICAL ERROR	LOGIC	WRITING INDEX	SEMI-IMPROVISATION INDEX	PURE-IMPROVISATION INDEX
ALL	APR.	MEAN	9.0	10.7	0.9%	8.0%	10.2	54.5	0.2%	7.0%	9.3	45.5	0.3%	8.2%	9.1	4.4	26.4	22.3
	DEC.	MEAN	11.5	12.9	0.9%	6.6%	11.9	67.8	0.4%	7.2%	9.7	56.1	1.6%	8.0%	8.1	6.7	32.2	23.6
		SIG.																
1ST YEAR	APR.	MEAN	7.3	10.2	1.1%	7.6%	8.9	47.8	0.3%	8.5%	8.0	42.5	0.2%	9.4%	8.0	3.2	18.6	16.5
	DEC.	MEAN	10.9	13.3	1.4%	7.3%	12.3	64.7	0.9%	8.6%	8.8	53.6	3.1%	10.2%	6.5	6.4	27.3	17.8
		SIG.																
2ND YEAR	APR.	MEAN	9.5	10.4	0.9%	9.6%	9.0	51.4	0.1%	6.8%	8.8	42.5	0.3%	8.9%	8.5	3.9	24.2	22.0
	DEC.	MEAN	10.2	12.3	0.4%	6.5%	10.3	64.0	0.1%	5.3%	10.7	47.9	0.8%	5.4%	8.4	5.2	35.1	22.7
		SIG.																
3RD YEAR	APR.	MEAN	10.4	11.6	0.7%	6.6%	13.1	65.7	0.4%	5.4%	11.5	52.4	0.3%	5.9%	11.0	6.5	37.8	29.4
	DEC.	MEAN	13.8	13.2	0.9%	5.7%	13.4	75.8	0.3%	7.9%	9.5	68.8	0.9%	8.5%	9.6	8.8	34.5	31.6
		SIG.																

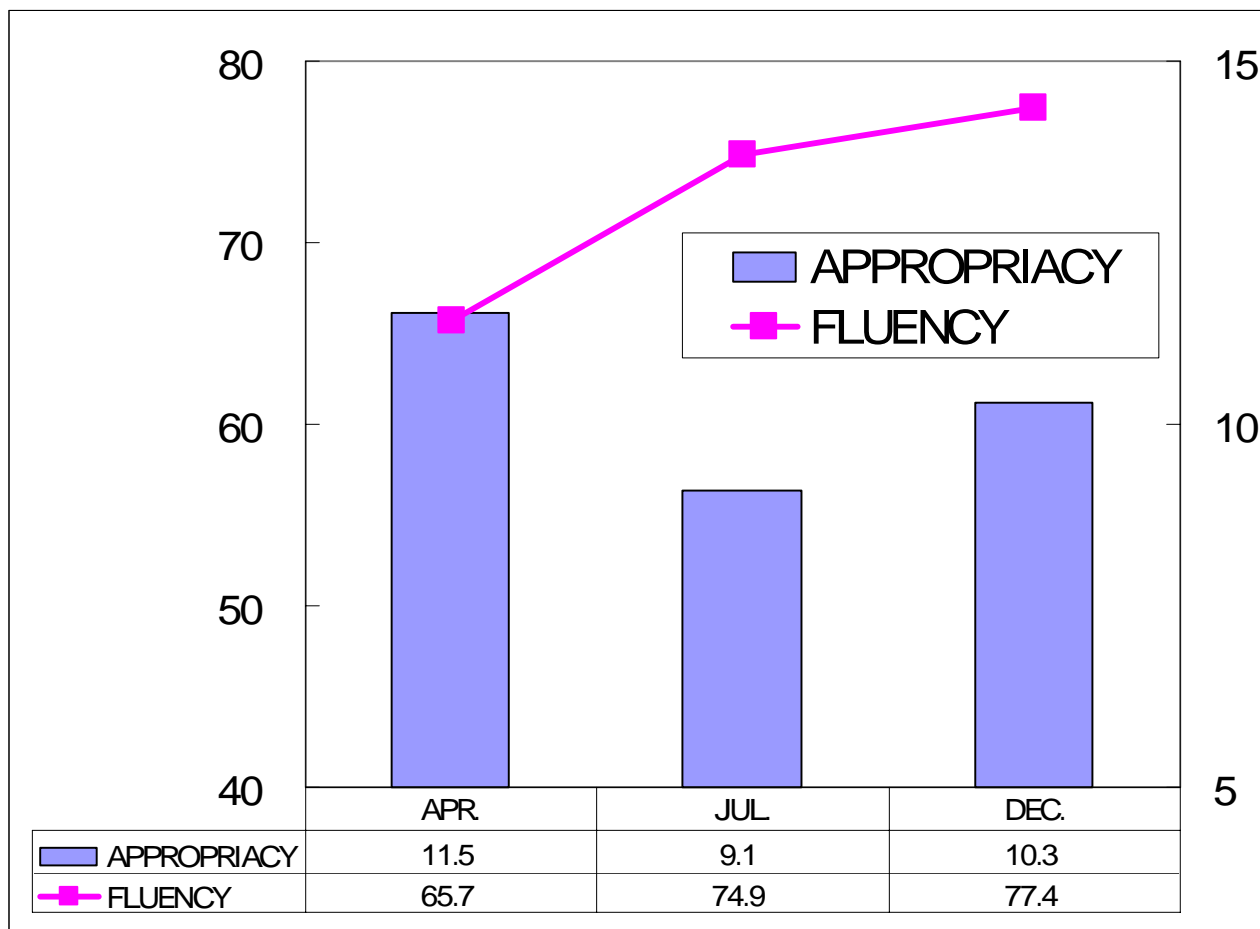


図5 - 2 - 1 - 1 SPEAKING における FLUENCY と APPROPRIACY の変化 (第3学年)

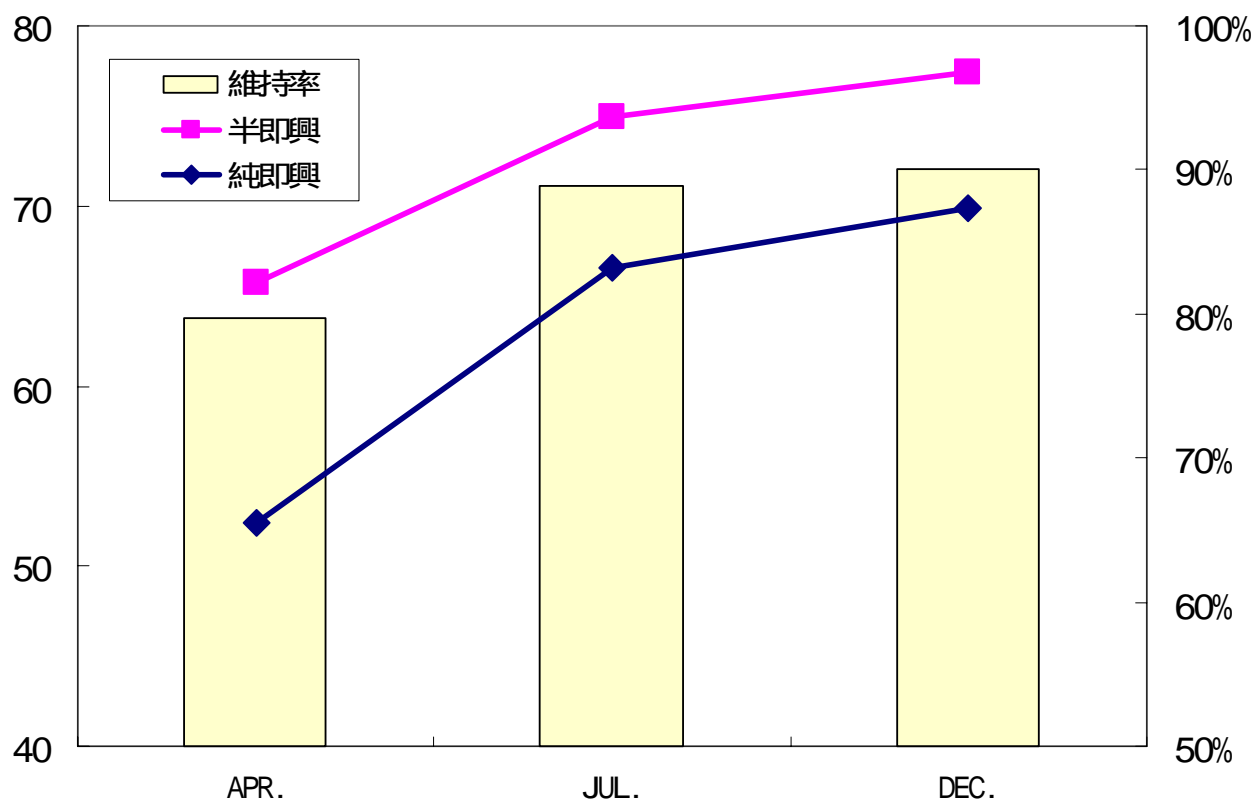


図5 - 1 - 2 - 2 SPEAKING と における FLUENCY の比較による即興性の維持率 (第3学年)

## ステップアップ・レポート

担当教諭

佐藤 将記

住田 恒三

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	英語理解
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読	160	wpm	暗誦	wpm	即興	wpm
イベント型	特になし						

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期		
生徒の 平均 値	音読	96.7	wpm		wpm	
	暗誦	***	wpm	***	wpm	
	即興	***	wpm	***	wpm	
ト レ ー ニ ン グ （ 長 期 反 復 ） 型	活動内容	定期考査		活動内容	定期考査	
		毎時間「ターゲット英単語」を教材にした単語テストを実施し、基本語彙の定着を図る。長文読解用のテキストを利用し、単に和訳するのではなく、個々の英文やパラグラフ間の関係に注目させ、全体を理解させる。				毎時間「ターゲット英単語」を教材にした単語テストを実施し、基本語彙の定着を図る。長文読解用のテキストを利用し、単に和訳するのではなく、個々の英文やパラグラフ間の関係に注目させ、全体を理解させる。
イ ベ ン ト （ 短 期 体 験 ） 型	活動内容	評価方法		活動内容	評価方法	
標準的な 授業プロセス	始めの5分間で「ターゲット英単語」を用いて単語テスト 残りの時間で読解			始めの5分間で「ターゲット英単語」を用いて単語テスト 残りの時間で読解		

# ステップアップ・レポート

担当教諭	佐々木 百合子	佐藤 将記
------	---------	-------

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	総合英語
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 90 wpm	即興 *** wpm
イベント型	個人学習ソフト『ぎゅっとe』		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期		
生徒の平均値	音読	***	wpm	***	wpm	
	暗誦	***	wpm	***	wpm	
	即興	***	wpm	***	wpm	
トレーニング (長期反復)型	活動内容	基礎 基本の反復練習		活動内容	基礎 基本の反復練習	
	評価方法	答え合わせをしながら関連事項を説明		評価方法	答え合わせをしながら関連事項を説明	
イベント (短期体験)型	活動内容			活動内容		
	評価方法			評価方法		
標準的な授業プロセス						

## ステップアップ・レポート

担当教諭

西 巖弘

堂鼻 香代子

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	コミュニケーション
--------	-------------	------	-----------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 75 wpm
イベント型	スピーチ、プレゼンテーション、トーキングマッチ、ディベート、ディスカッション		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の平均値	音読	***	wpm	***	wpm
	暗誦	***	wpm	***	wpm
	即興	74.9	wpm	75.8	wpm
トレーニング (長期反復)型	活動内容	評価方法	活動内容	評価方法	
	1分間モノログ (ペアで身近なできごとや自分の思いについて語る) 2分間モノログ (ペアで賛否両論のある話題について語る) U.EAディスカッション (グループで議論に必要な表現(U.EA)を暗記して使いながらディスカッションをする) 5分間ライティング (2分間モノログと同じ話題について、5分間で100語程度の論を完成させる)	と 発話語数 (パートナーがワードカウンターでWPMを計測) 観察と定期考査 ALTによる添削	1分間モノログ (ペアで身近なできごとや自分の思いについて語る) 2分間モノログ (ペアで賛否両論のある話題について語る) トーキングマッチ (2分間 1対1で30秒ずつ交互に主張し、討論する) 5分間ライティング (2分間モノログと同じ話題について、5分間で100語程度の論を完成させる)	と 発話語数 (パートナーがワードカウンターでWPMを計測) ジャッジによる評価 ALTによる添削	
イベント (短期体験)型	活動内容	評価方法	活動内容	評価方法	
	パブリック・スピーチ プレゼンテーション ディベート・ディスカッション	と JTLとALTによる共同評価 (論拠と態度) ワークシート、授業の参加態度や発言による評価	トーキングマッチ ディベート プレゼンテーション ディスカッション	と JTLとALTによる共同評価 (論拠と態度) ワークシート、授業の参加態度や発言による評価	
標準的な授業プロセス	導入 1分間モノログ 2分間モノログ U.EAディスカッション ディベート・ディスカッション・リーディング まとめ 5分間ライティング		導入 1分間モノログ 2分間モノログ トーキングマッチ ディベート・ディスカッション まとめ 5分間ライティング		

## ステップアップ・レポート

担当教諭

為西 正和

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	時事英語
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 160 wpm	暗誦 *** wpm	即興 *** wpm
イベント型	プレゼンテーション		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期	
生徒の 平均 値	音読	145	wpm	154	wpm
	暗誦	***	wpm	***	wpm
	即興	***	wpm	***	wpm
ト レ ー ニ ン グ  (長 期 反 復 ) 型	活動内容	英字新聞 プリントを 使った音読(数値は各 レッスンの初回の平均値) e-ラーニングを使った音 読 リスニングトレー ニング ショートディスカッション (約10分間)		評価方法	wpmを計測する  wpm,点数等が表 示される  観察
	活動内容	英字新聞 プリントを 使った音読(数値は各 レッスンの初回の平均値) e-ラーニングを使った音 読 リスニングトレー ニング ショートディスカッション (約10分間) 英字新聞の要約		評価方法	wpmを計測する  wpm,点数等が表 示される  観察  相互評価
イ ベ ン ト  (短 期 体 験 ) 型	活動内容	プレゼンテーション		評価方法	発表者 発表内容 態度等 聞き手 質問 意見等
	活動内容	プレゼンテーション		評価方法	発表者 発表内容 態度等 聞き手 質問 意見等
標準的な 授業プロセス	ショートディスカッション 音読 内容理解 e-learningを使ったトレーニング プレゼンテーション(学期に1回)			ショートディスカッション 音読 内容理解 e-learningを使ったトレーニング プレゼンテーション(学期に1回)	

## ステップアップ・レポート

担当教諭

住田 恒三

ナタリー

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	英語表現
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 100 wpm	即興 *** wpm
イベント型	ディスカッション		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期		
生徒の平均値	音読	***	wpm	***	wpm	
	暗誦	80	wpm	95	wpm	
	即興	***	wpm	***	wpm	
トレーニング (長期反復)型	活動内容	生徒各自が選んだ題材(新聞や雑誌やインターネット等)を基に、毎時間異なったテーマでの議論を進める。本校を訪問する外国からのお客さんとの直接的交流を楽しむ。		評価方法	生徒各自が選んだ題材(新聞や雑誌やインターネット等)を基に、毎時間異なったテーマでの議論を進める。本校を訪問する外国からのお客さんとの直接的交流を楽しむ。	
	活動内容			評価方法		
イベント (短期体験)型	活動内容			活動内容		
	評価方法			評価方法		
標準的な授業プロセス	新聞記事を活用して、議論を続ける			新聞記事を活用して、議論を続ける		

## ステップアップ・レポート

担当教諭

近藤 あゆみ

第 3 学年	国際コミュニケーション	科目名:	通訳演習
--------	-------------	------	------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 75 wpm
イベント型	逐次通訳プレゼンテーション		

## 【実践の記録】

学期		1学期		2学期		
生徒の平均値	音読	140	wpm	175	wpm	
	暗誦	90	wpm	***	wpm	
	即興	***	wpm	85	wpm	
トレーニング (長期反復)型	活動内容	・QR(クイック・リスpons) ・シャドーイング  ・サイト・トランスレーション  ・「頭ごなし訳 訓練」 ・「区切り聞きリスニング」 訓練	評価方法 カセットに声を録音 することで、教員と自 己による二重評価を行 う  ペアによる評価  自己評価 レビュー テストによる客観的 評価	活動内容	・リテンション ・リピーティング ・メモ取り、通訳メモ  ・内容先取りの単独各  ・ミッシングワーズ: 文脈か らの推測訓練  ・サマライゼーション	評価方法 自己評価 ペアによる評価  板書することで答を 確認し、共通理解を 促す  口頭・板書による答 合わせ  サマリーを提出し、J TEが評価、評価をつ けて生徒に返す
	イベント (短期体験)型	活動内容	評価方法	活動内容	評価方法	
	・逐次通訳プレゼン テーション ・英語でのスピーチ	・ビデオに記録しピア リビジョンを行う		英語でのスピーチ	ビデオに記録し、ピ アリビジョンを行う	
標準的な 授業プロセス	レビューテスト(5分) 同時通訳トレーニング ペアワーク プレゼンテーション			【前半】 同時通訳トレーニング ペアワーク プレゼンテーション 【後半】 入試問題を用いたリスニングトランスレーション、 またはリピーティング・シャドーイングなどの音読 訓練		



## (3) 指導評価シラバスの開発とそれに関わる研究開発3カ年間の成果と考察

## (1) 目標値の達成度について【表5 - 3 - 1 - 1】

ステップアップ・プログラムの第3案(SUP3)で設定したスピーキングの「流暢さ」の目標値と、WSA+SAテストの最終実施回の結果との比較を表5 - 3 - 1 - 1に呈示する。

目標値に対して、平均値では半即興の Speaking において、1年生と3年生で目標値を上回っている。その他は目標値を下回る。また、到達率も期待に応えていない。

この点については、今後とも継続的に目標値への到達を目指した指導を行う必要がある。

しかし、本校のSELHi研究開発の全体を通して部分的な成果を積み重ねてきたにもかかわらず、生徒の目標への到達率が期待通りでないことについて、以下の2点を考慮して、今後のさらなる指導へと繋げたい。

『目標値』 目標値の設定が高すぎるという考えは不適である。生徒に越えさせたいハードルとして、絶対的な規準をしっかりと維持し、適切な指導をすることが望ましい。

『個人差』 個人ごとにスタートラインや伸び率が異なる。とくに学年によってはスタートラインが低い生徒を多く抱える場合があり、対応が難しい。しかし、さらに新たな指導法の工夫などを施す好機でもある。またに生徒自身の成長の度合いを肯定的に評価することも忘れてはならない。

しかしながら、本校生徒の「英語による論証能力」は、本稿6 - (1) - (1)～(3)に示されるように、SELHi指定以前に入学し、SUPのシラバスによる指導を経験しなかった平成14年度入学生と比べて、とくに「流暢さ」においてめざましく成長している。このことを本校のSELHi研究開発の一定の成果として評価し、今後の取り組みへと繋げたい。

表5 - 3 - 1 - 1 SUP3におけるスピーキングの「流暢さ」の目標値とWSA+SAテストの平均値(WPM)

	1年生		2年生		3年生	
生徒数	40		40		34	
目標値	60		70		75	
Speaking						
平均値WPM	64.7	53.6	64	47.9	75.8	68.8
到達度数	22	13	18	9	15	10
到達率	55%	33%	45%	23%	44%	29%

(平成18年12月)

## 〔2〕WSA テストの簡易版の構想

WSA テストの簡易版の必要性

研究開発の第一年次において、開発の目的能力である「英語による論証能力」を測定するためのテストを独自に開発するにあたって、以下の4つの作成方針を考慮した。

**「一貫性」** 1学年から3学年まで同一の指標で評価し、指導の成果を時系列で比較できること

**「客観性」** 数値化に際して採点者によるばらつきが少なく、絶対評価できること

**「簡便性」** 能力が評価される機会をできるだけ頻繁に与えることができること

**「フィードバック」** 技能向上のためのポイントを生徒が理解しやすいこと

現在のWSA+SAテストは、とくに上記の「一貫性」、「フィードバック」に関しては十分機能していると考えられる。

一方で、上記「客観性」と「簡便性」については、以下の課題がある。

「客観性」・・・WSAテストで測定する指標については、研究計画段階で概念化し、第一年次の試行段階で、信頼性と妥当性を検討した。その結果、客観的指標としての「流暢さ」と、準客観的指標としての「正確さ」はともに信頼性が確認された。しかし「適切さ」に関しては、出題テーマの主効果があり、これが検討課題であった。また、評定者間の一致度についても、研究活動を通じてWSAテストの採点を行ってきた経験から、評定者ごとに採点基準の個人差があり、「客観性」の点で疑問が残される。

ただし、教育現場で日常的に行われる形成的評価としての利便性を考えると、これ以上の精密さを求めることと、教育的な意義や効果とのバランスの点で、これが限界ではないかと思われる。

「簡便性」・・・頻繁に実施するためには実施・採点・返却の期間が短いことが求められる。しかし、現在のWSAテストの実施・採点の方式は、答案用紙とカセットテープをJTLとALTで交換しあって採点を行うなど、短時間での作業が難しいことと、答案の保管・管理が難しいことなどの問題点があり、能力が評価される機会をできるだけ頻繁に与えるという点で、研究開発の期間が終了した後も、十分に継続が可能な形態へとさらに簡便化することが求められる。

これら上記2点を考慮して、WSA テストの簡易版を構想する。

WSA テストの簡易版

WSA テストの簡易版を構想するにあたっては、出題に関する事柄はこれまでと同じとしつつ、「評価」の部分を生徒への重要なフィードバックを残しながら簡略化するという形態を用いた。

名称 『WSA シンプル』

目的

発信能力の向上の目標を生徒が持ち続けることができる  
WSA テストの特徴を残しつつ、採点プロセスを簡略化し、評価を継続できる

条件

出題形式・内容と解答時間はすべてこれまでと同じ  
年間3回実施する(4月、7月、12月)  
授業担当者が一人1~2時間で20人採点できる

表5 - 3 - 2 - 1 『WSA シンプル』の評価者および評価の指標と方法

EVALUATOR	FLUENCY (SPEED)	APPROPRIACY (LOGIC)	ACCURACY (GRAMMAR)
JTL	-	SPEAKING	-
ALT	-	WRITING	WRITING
STUDENT	SPEAKING WRITING	-	-
EVALUATION METHOD	WPM	10 POINTS(FULL MARK) = 5(ARGUMENTS) × 2(POINTS)  <u>ARGUMENTS</u> = 2 GOOD ASPECTS + 2 BAD ASPECTS + OWN OPINION  <u>POINTS</u> 2 SUFFICIENT 1 INSUFFICIENT 0 NOTHING	<u>WRITING</u> SPELLING GRAMMAR

## (4) 研究開発3カ年間の成果と考察に基づくSUP4の構想

## (1) SUP4における新しい指導時期の位置づけ

本校のSELHi研究開発の3年間の成果と課題に基づいて、指導時期ごとの位置づけを新しく定義した。とくに考慮したのは、「質」の育成と「量」の育成とは、どちら先かということである。

詳細は表5-4-1-1-1に示す。これまで3学年に位置づけていた加速(Acceleration)のフェーズを1学年に位置づけ、「量」の育成を前倒したことで、今後どのような影響・効果が見出されるかが問題となる。

表5-4-1-1 SUP1～3の成果と課題およびSUP4の位置づけ

		SELHiでの取り組み		今後の取り組み	
学年	SUP1～3	成果と課題	SUP4	位置づけ	
1	Formation	インプットの充実を主眼とすることで、2・3学年への基礎固めとなった。 しかし、発信能力では「流暢さ」が最も伸びる時期であり、この点を考慮する必要がある。	Acceleration	鉄は熱いうちに打て インプットの充実を図るとともに、「量」を重視したトレーニングを通して発信の「流暢さ」を身につかせ、高校での英語学習に対する自信とやる気を持たせる。	
2	Creation	おもにライティングによってアイデアを創造し、まとめることで、発信能力の「適切さ」が向上した。 しかし、スピーキングでは「流暢さ」が停滞する時期でもあり、この点を考慮する必要がある。	Creation	創意工夫を忘れるな インプットの充実を図るとともに、「質」を重視したライティングとスピーキングの反復トレーニングによって発信の「適切さ」と「正確さ」を身につかせ、英語で議論できるレベルへと高める。	
3	Acceleration	議論活動によって、スピーキングとライティングの「流暢さ」が向上した。 しかし、「正確さ」や「適切さ」が低下する場合もあり、この点を考慮する必要がある。	Integration	己に徹して人のために生きる インプットの充実を図るとともに、「量」と「質」のバランスを重視したトレーニングを通して「効果的な」発信能力を身につかせ、より高度な学習・研究へと発展できるレベルへと高める。	

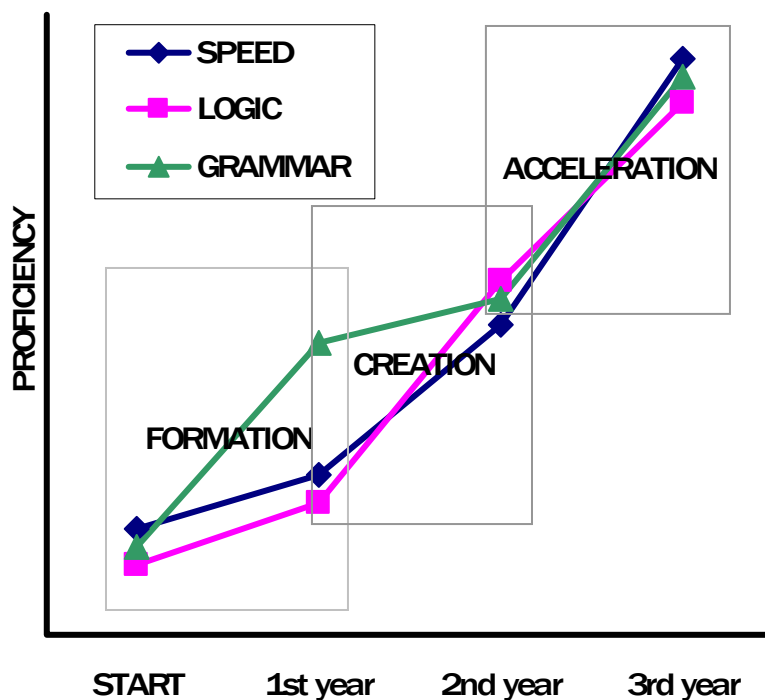


図5 - 4 - 1 - 1 SUP1 ~ 3における指導フェーズごと能力向上のイメージ・モデル

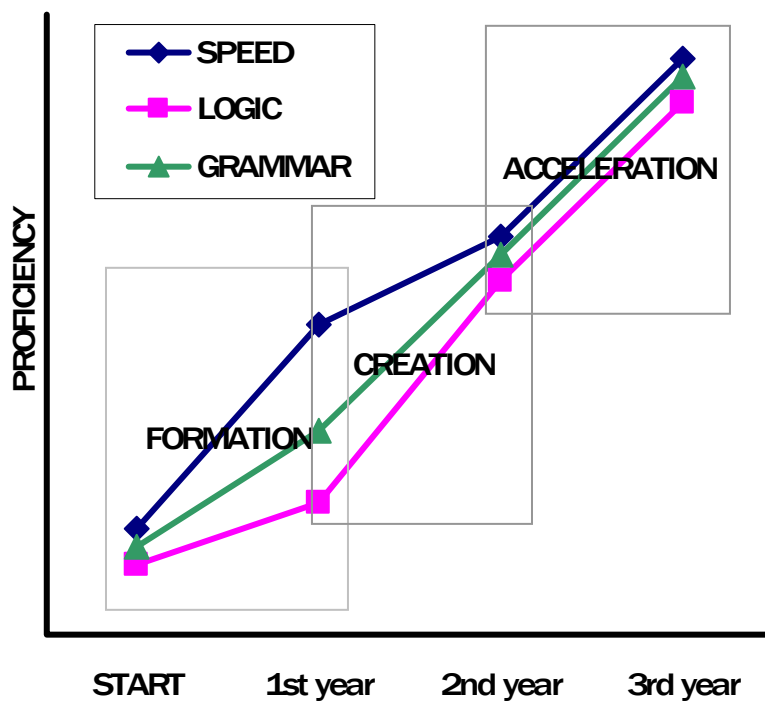


図5 - 4 - 1 - 2 SUP4における指導フェーズごと能力向上のイメージ・モデル